

始めて樹心中に白骨を蓄へたのを見、奇怪の説を言ひふらすのである。近年オルレアンスに、一樵夫があつた。他より大木の枯槁したる者を購ひ、縦に之を切つた處、根に近き樹心に、人間の髑髏と鎖骨とを包擁するのを見て、鋸を捨て、驚き走り、之を近隣に告げたので、樹は俄かに妖ある者と稱せられ、恐れて近づく者すら無い、其事官に聞えて技師を派して之を見せしめると、樹は實に數百年外の老木で、往時此樹幹の一面空洞をなせし頃、墓地として死屍を納めたのか、又は乞丐の類が此空洞を家として、終に此中に死したるのを、何人も知らずに打過ぎたのか、年處を經るに従ひ樹の成長力は漸次此洞口を閉じたるのみならず、内腔も又木質の充す所となり、白骨は深く木理の中に包まるゝに至つた者で、妖でも怪でもないが、學理上參考に資する所あればと、直に國立博物館に收容せられ、髑髏樹として今猶公衆の觀覽を恣まにして居る。

花間漫錄

植物の精

植物は非情か有情か、假令非情としても含羞草の如く感覺を持つとすれば、意識はなくとも、絶對的に非情とのみは認められぬ、非情でなくも何等かの精靈なしとも斷言し得られまい、此處に於てか、三十三間堂柳の精も出来るし、墨染櫻の精もある、其外化銀杏、二股榎、などいふ怪談も出て来る、『老樹千年にして靈あり、木魁といふ』と支那の學者も賛同して居る、西洋ではどうかといふと、日本や支那より猶甚だしく怪談に富むて居る。由來富者多ければ貧者多きと同じ理で、文明に進む程、斯様な想像力が

盛になる爲、妖怪談は澤山になる、究理の學が進むに連れて、不究理の事實が澤山に出て来るのは自然の數である、況して科學こそ發達して居るが、國民多數の品性や、性情が物質的にのみ走ると、反つて迷信が多くなる、夫て西洋には植物の精に就いての嘯は多い、甚だしいのは、一輪のカンタアベルの花にも、一つづつ小さな魔が棲ひて居ると言つて恐れる位、夕方に此花を切ると、其中に居る魔が、其人を夜寝かさないなぞと言つて忌み嫌ふ。然し植物の精の中で、小説的の優しく麗はしき話を持つて居るのは支那である、西王母、羅浮仙、これは神仙であるとしても、桃梅の精ではないか、牡丹の花が二美人に化けたのや、蓮が楚楚たる佳人と化したなど、面白い話は幾らもある、是等の佳話を蒐めたならば、随分面白い物語りが出来るだらう。

高價の酒

酒は皆植物から製せられる、上戸黨に取つては、植物は實に生命である、五斗兵衛や李白は、植物の奴隷と言つてもよい。先づ從來の日本の清酒である、劍菱でも正宗でも、皆米の水である事は三才の小兒と雖も知つて居る、麥酒や葡萄酒の原料は字の如く、三鞭でもウイスキーでも、ブランデーでも、恐らく植物を原料とせぬはなからう、支那の延命酒、香酒、梅酒、櫻桃酒、何物か植物ならざるなきで有る、其處で酒の價格程尊い者はない、先年倫敦で競賣されたバルガンデイの古酒は、二本で八百圓であつたが、猶驚くべきは、ブレイメン市のデ、ピイユといふ旅館に貯へられて有る葡萄酒は、僅か一打であるが、有名な歴史附の代物で、宗教上非常に尊貴なものとなつて居る、何でも今から

二百五十年前に醸造されたものだとあるが、原價と其金利と倉敷料とを積算すると、一本凡そ四百萬圓に當るから、コップ一杯の代價は五十萬圓、一滴に割當ると實に六十圓とは、驚くべき價ではな
いか。夫から富豪ロスチャイルドの豪奢と稱して、一時歐洲の新聞界を騒がした葡萄酒は、一本一千百十四圓で、四打あつた。これはシエルド河口で難破した船から引揚げられたのだが、三十六年間水の底に沈んで居たのであつた、是等は果して旨いかどうかは解らぬ、只珍らし者好として富豪の豪華を誇るに過ぎぬけれども、贅澤の限りである、我日本の左黨は果して、一滴六十圓の酒を仰ぐの概があるかどうか。

紋章

紋章は東西を通じて重に植物を用ゐる、稀には動物のないてもないが、

十中の九分九厘迄は花卉で有る事が殆んど一致して居る。

畏くも我皇室の菊花御紋章は、世界に渡つて有名な者で、西洋の牽強

家は、菊、屬名クリサンセマムは、キンリサンスモン（禁裡さんの紋）

の轉訛だと通な洒落を言ふ者さへ有る。一體紋章といふ者は、自己を表

章識別するに使用した者であるが、夫が今日では儀式に用ゐるやうにな

つたので古くは宮中の相撲節會に、勝ちたる方は菊の花を簪にして退出

した、又オリンピアの競技に勝ちたる者は、御約束の月桂樹を戴いた者

で、戦捷の標榜として椰子の葉が有る、源太景季の箴の梅の如きは、日

本武士の優美なる性情を示す者にして、風流千古に冠たる者である、我

國の櫻の如きは、大和民族の正義の權化にして、其優美にして且つ壯麗

なる花容は、宇宙殆んど其比を見ない、英國の國花たり紋章たる者は蓋

薇、蘇格蘭は薊、佛蘭西は苜蓿又は百合合で、いづれも花を用ゐて居る
 就中我俗たる個人の紋章は、梅、櫻、瞿麥、睡菜、茗荷、鳶、茶の花、
 澤瀉と殆んど植物のみである、中に平氏の揚羽蝶、新田の中黒、渡邊の
 一文字に炭團三つなどといふ除外例もあるが、是等は其祖先が皮肉家て
 あつたといふ事を表示するに過ぎないかも知れぬ。

植物の美容術

美容術や美顔術といふ事が、此頃大分話題に上るやうになつて、そんじ
 よ其處等の路次にも、美顔術教授などといふ看板が出て居るやうになつ
 た、定めし令嬢令夫人の虚榮心漫々たる人達は、竊に玉歩を運ばれて
 あらう。然るに難有い事には、人間以外の動物や、植物などは、天然自
 然に美容術を持つて居る、江蓠が水に紅を漲したり、カラジウムの葉が

墨流のやうに彩れたり、又は櫻桃梅李の花咲き匂ふなどは、凡て天與
 の美容術である、更に其色素を検鏡の下に照したらば、如何なる細胞の
 働きて、斯の如く美しくなるかが知れる、人間の美容術も、徒らに外部
 からのみ矯正せず、内部から組織を變更したらよいと思ふ、頬にホン
 ノリした色を見せるには、櫻の色素を、唇の紅の代りに紅藍の紅葉の色
 素を注射し、頭髮へ香水香油を傳ける面倒を廢して、自身の分泌物は直
 ちに蓄薇莖へリオトロープの香氣を放つやうにしたがよからう、醫學進
 歩の今日、首尾よく研究し盡されたら、當に學術の成効のみならず、又
 金儲の基であらう。

日本に歸化したる植物

動植物の原始は今研究すべき問題ではない、又自分等如きには解らぬけれども、兎も角も世の中に出て、日の目を見るやうになつた植物が、風や雨や鳥獸によつて、偶發的に種子を頒布され、夫が四方に擴がつて、勢力範圍を擴張する、勢ひ近い所から始めて、漸々遠い方へ擴がるのであるが、海山越えて、亞米利加や阿弗利加の花迄が、自然に絶東の日本内地に迄勢力を及ぼし、終に野生となつて了つたのが有る。渚の汀や、庭先などに生へて居るから、日本在來のものと思ふと大變な相違で、之が阿弗利加の喜望峰などから移住して來たので有る、是等は誰も輸入したのてなければ、従つて栽培しつては無い、全く人知らぬ間に飛んで

來たので、之を歸化植物といふので有る。

昔から支那人や韓人が日本へ歸化して、僅かに舊時の姓を稱する位、全く日本人と同化したのが有る、然し是等歸化人の多くは、日本人と結婚し、雜種に雜種を襲ねて、終に日本化したので有るが、歸化植物の多くは、中々雜婚しない、彼等自身で婚嫁し、何處迄も純粹な系統を蕃殖して行く、宛ら日本の移民が米國や布哇で増殖して行くと一般で有る、同化しない人種は、移住地に於て嫌厭される、米國の排日熱が夫て有る如く、此歸化植物は無暗に同種を増すので、在來日本に存する土着の植物の營養分を奪ひ、漸く生存競争に打勝つて、自分斗り繁榮する爲、今日では甚だしく嫌はれる、然し抜いても、後から生へて來るので、殆んど征討に盡さて了ふ。今に野も山も是等の移住民なる歸化植物の爲に占

領されて了ふかと氣遣はれる。
 若し鋤鍬を容れね野原や、家屋を取毀した後などへ行つて見ると、地を蔽ふ迄に生へて居るのは、皆此歸化植物で、在來の野草は見る影もない丸てアイヌ人種が萎縮されて居ると一般で有る。
 何故歸化植物のみが斯く強壯で、在來の植物が衰頹するかが疑問で有るが、どうせ萬里の波濤を越えて、遠征を企てる程の奴で有るから、いづれも極めて腕節の強い頑丈な質で有る、一年旱枯が續かうが、半年雨が降り續けやうが、如其事には少しも驚かない、盛んに蕃殖をするから、五風十雨の順調を俟つやうな、生優しい日本植物などは、到底肩を列べることが出来ない、ヒテ辛い生存競争に敗北して了ふ、恰白人労働者が、黄色移民に勝てないやうなもので有る。今市中を歩いて、屋根瓦の

間からニヨキ／＼生へて居る姫昔蓬などは、同じ歸化中でも殊に頑強だ、名斗り優しくても、性質は鐵よりも固い、火にも焼けず、水にも溺れぬ程の不死身で有る、昔は「汝ん所の家根にへん／＼草生かすぞ」と啖呵を切つた、其へん／＼草の薺は、多く家根の乾き切つた所に生へる程丈夫なものであつたが、今は姫昔蓬野幌菊などいふ歸化的移民に壓迫されて、殆んど家根の上には影も形も止め得ない、考へて見ると國粹が衰亡するやうな氣がして甚だ心許ない。
 然し歸化植物は必ずしも無趣味殺風景なもの計りではない。等しく優しい植物で有るから、花も咲き、實も結ぶ、葉は緑の玉翡翠を琢いたやうで盆栽の技術一つでは立派に眺矚されるやうなのがあるではないか、元より普通の人が見ては、在來の野草と選ばないので有るから、

此處が西洋臭い大陸臭味があると云ふ點はない、然し此歸化移民を、草莽の中から抜くのも、時に興味が無いから、試に其重なるものを列記して見やう、但し外國植物でも、栽培の目的で輸入した天竺牡丹、大波斯菊、天竺葵のやうな類は、譬へ治く普及するにせよ、歸化植物ではないから、是等を同一視せざるやうに望む、此處に歸化といふのは、全く日本の野生となつて在來の野草と分つ無きものをいふのである。

紫 酢 漿

籬の下や庭の隅に、腐植土の多い、土質のフカクした處に、普通の酢漿よりも葉が多きく、葉柄が長く、深緑色の極めて鮮かな葉を簇らして、桃色の稍濃い、物に譬へれば、鶉色の紐のやうな媚かしい色氣をし

た花が、殊勝らしく咲いて居る、之が紫酢漿といふので、庭の捨石の邊に植えても又盆裡に養つても、極めて雅致に富むもので有る、日本の酢漿のやうに、無暗と莖を伸して、一面に葉殖しないのが價値で有る、靜かな庭の下草などには必要なものである、根を深く地中に下す性質で、根の先に塊を有し、此塊から幾多の子を増殖して行く、蕃殖力は可なり強い、本來酢漿は文字の如く、莖が酢いので有る、嚙むと酢漿が出るから、其儘名にされたので有るが、此紫酢漿は酸味が少ない、殆んど舌には感じない程で有る。

東京附近で此草の多いのは、市内にも間々有るけれど、向島千住田端日暮里池袋目白大久保澁谷目黒大崎品川と凡て東京の郊外に多い、大抵は人家の藩籬の下や、庭の隅などに生へて居て、野原には割合に少ない、

必竟は花が美しい爲、野外に有る時は、人の爲に抜き去られるといふやうな關係が有るのかも知れない。

本來此草の原産地は喜望峯で有る、喜望峯の鼻などに在るものが、どうして東洋の涯迄來て土着したかと言ふに、昔例の紅毛や葡萄牙が交通した時代に、是等の船が家畜を積むて居る、然るに永の航海で青草が乏しくなるので、喜望峯へ寄航して、薪水を補給する際、ドシ／＼青草を刈り取つて船中に貯へると、其時此植物の根が一所に入る、勿論喜望峯の青草の大半は、酢漿ともいふべき程澤山ある。

夫から此船が長崎へ來て、積残りの糧秣を捨て、又新しいのと代へる、其時に生活力の強い球根は、忽ち根を下して、長崎を根據地とし、退々と東の方へ擴まつたのであるさうな。

全體酢漿類は日本にも澤山あるが、一番多いのは喜望峯といふ事で、今園藝的に栽培して居るのに木立もあれば、車葉も有り、葉に星の出で居るもの、莖も葉も赤いもの、松葉のやうに細いもの、數へたら二十種からになる、花も赤、白、黄、紫、桃色、絞などて、花容葉形、共に酢漿とは思へぬのが有る。又其球根を食用に供するのさへ有るけれども、歸化して野生となつたのは、前配の紫酢漿で、歸化植物中最も美なるもので有るから、勢ひ其數も少ない。

赤詰草 白詰草

阿蘭陀紫雲英といひ、西洋苜蓿といふのは之で、歸化植物中、動物の飼糧として、最も有益で有る。丸の内の三菱原や、御濠の塙などに、春の末から夏秋に渡つて、紫雲英のやうな花を咲かせる、綺麗な植物で有る、

西洋から來る繪葉書に、瑞いものとして、四ツ葉のクローバーなるものが有る、其クローバーこそ實に此詰草で、普通は三ツ葉で有るが、稀に四葉が有る、夫を捜し當ると、運が向くと云つて、西洋では非常に大切にす、丸の内の原などて、一二時間も根氣に搜すと、此四葉のものが十株や十二三株は見出される、但し此四葉は一株の中に偶々變生が有るのではなく、四葉の出る株は別に在るものだから、四葉を見出したら、株ごと掘取つて鉢へ植ゑて置くと、後から退々に出て來る時には、五葉のものも生じて來る。

赤詰草と白詰草は、殆んど同じで有るが、赤は白のやうに匍匐性を有せず、葉の形も白の丸きに反し、赤は葉先稍尖つて居る。四つ葉の多いのは重に白に有るやうだ。

詰草の名の起りは、之も外國から荷物を送るに、其乾燥したものを、箱の中に詰草として用ゐたからだといふ、詰りお濠の埋草となつた理だ甚だ難有くない運命で有る、或ひは此草が荳科の植物で、花の形が指先に似て居るから、爪草といふ方が正しいと有る、いづれが名の起りかは知らぬが、日本に來て、今日斯の如く蕃殖したのを見ると、詰草の方が元らしい。

此草は紫雲英と同じく、綠肥として効用が有る。而して根を引ぬいて見ると、荳科植物の通有する根瘤といふ玉が無數に附いて居る、此瘤の中には、根瘤バクテリアが居る、常に空氣中の遊離窒素を取つて生活するから、土地を膨軟ならしめ、土質を改良する、此草の生へた後へ、他の植物を植ゑると能く生長する、花も美に、葉も綺麗で、四つ葉の景物さ

へ添えて、其上肥料にも飼糧にもなる、歸化植物中有益の點では第一のものて有る、歸化の年代は正しくは知れぬけれども、紫酢漿よりは稍遅れて、徳川氏の極めて末か、明治の初年であるらしい、猶此草は詰草としてのみ渡來した斗りではない、種子を取寄せて試作した事もあるから、夫が脱出して、壠間原野に野生して了つたのも少くはなからう。

野 幌 菊

葉の深緑色な、丈の短かい、黄色な殊勝らしい花を、春の初めから絶へず咲き出す草で、今は到る所に生へて居る、野原は勿論、日本橋の真中の家根の上でも、塀の上でも、場所を嫌はないのは、猶姫昔蓬の如くだが、花や葉の愛らしいのは、數等優つて居る。菊科の植物で、一年生では有るが、花が咲き、實を結び、夫が落ちれば直ぐ生へて、忽ち生

長する、寧ろ半年草て有る、少し日溜てさへあれば、寒中ても平氣に咲いて居る。

野幌菊といふのは、在來の幌菊（菊唐草）に似て居るから、夫て野の一字を冠したので有るけれど、花などは似ても似附ぬほどの違ひが有る。

此草は歸化植物中、極めて小さい、殊勝らしい風韻を持つもので、五七年前には縁日で賣つて居るのを見かけた、勿論馬糧にも肥料にもならない、鶏さへあまり喜んで食へぬので、益々殖える斗りて有る。

此草の歸化の徑路は、馬糧などに種子が附著して來たのもあらうし、又支那邊へ蕃殖したのが、大風の時に日本の地へ種子を吹き飛ばされたのもあらう、此種子が蒲公英のやうに、風に乗つて飛ぶ勢ひは、實に豫想外である、十里や二十里へ飛ぶ位は、瞬く暇て有る、开して蕃殖力の

強い事は、百が百皆發芽するので、靴燥地でも濕地でも、少しも選ばな
50

洋種朝鮮牽牛花

朝鮮牽牛花は地方によりては狂茄子とも稱し、漏斗のやうな大きな花が
咲く、曼陀羅華とも言ふけれど、佛典に在る曼陀羅華の天花とは違ふ、
丈の高いのは六七尺位になつて、極めて雄大な草といふよりは、寧ろ
木と言ふ方が中つて居る。

此草の面白い事には、何も心あつて驅逐したといふ理ではあるまいが、
此草が渡つたからと言ふものは、何時しか在來日本に野生して居た朝鮮
牽牛花といふものは全く勦滅されて了つた。宛ら洋犬が來て、純日本犬
が皆無になつたやうな體裁で有る、優勝劣敗は獨人類斗りでは無いと見
える、此草の實を食べると、發狂するといふ所から、狂茄子の名が有る
發狂は如何か知らぬが、慥かに有毒らしい、腦でも刺激されて、一種の
異狀を呈するのであらう、海濱の漁村などには幾らも野生して居る。

庭石菖

花が美なる點から言へば、紫酢漿に勝るとも劣らない、鳶尾科の小さ
い植物で、丈は三四寸、大きくとも五六寸には出ない、花は紫、紅紫
底紫と、一體、紫色のが多い。又の名を草蔘藤といふのは、庭石菖
よりも優美で有る、蓋し庭石菖とは、葉の簇生する形が、石菖に似て居
るからであらう。

元此草は園藝品として渡來したもので、種子で來たのが、蕃殖したので
有るが、今では種が飛び飛んで、各所の野原に野生して居る。勿論夏の

縁日植木などで、小さい鉢植にして賣つても居る、花は一日しか保たないが、後からくと咲いて、夏一杯は盡きない、庭の飛石の邊や、花壇の椽栽には綺麗な草で有る。之が野生になつて居るのを見ると、野に遺賢ありの心地がする、潮來出島の眞菰の中で蕩蕩咲くとは殊勝らしやといふ歌は、此草が雜草に交つて咲いて居る時の觀である。况して名からして草あやめ、他人の事とは思へない。

大犬罌丸

苟しくも植物學者で候といふ者が、斯う言ふ名を附けるといふのは、美的感念が無い所では無い、常識を缺いて居る事を證明して餘り有る、他の悪口を言へば己れの品性を付度されるやうなものだ。大の罌丸、實に怪しからぬけれども、夫が洒落ても冗談でもない、全く

學者の使用する本名で有る。

抑々何て斯る瓢金な名を附けるかと言ふと、實の形が恰も夫に似て居るといふのだが、何とか外に譬へやうも有りさうなものだ、随分殺風景没趣味の限りては有るまいか。

然も此大犬の罌丸は、名こそ忌はしいけれども、草の形も花の姿も極めて優しい、玄參科の植物で有るから、鍬形草のやうな四出の鮮紫色の花で、稍鐘形をして居る。大さは曲尺の直徑三分も有る、葉も従つて小さいもので、地面に蝸附するやうに生へて、一杯に廣がる。今では何處でも到る處にあるが、大崎の田甫や、不忍池の周圍、茅町に面した大淖の縁などには、藜蘊と交つて毛氈を布いたやうだ、丁度二月の中旬から三月四月にかけて咲く花で有るから、春の始めの盆栽として、懸崖萎蕤の趣

きを造るには實に適して居る、开して西洋植物の花なる係は少しもない丸て高山植物と言つた形が有る、但し花が一日で、且日射の下で無ければ咲かないのは、此花の特性で有るから、座敷の奥などへ入れて置いては、十分に開花させる理には行かない。之も種子を輸入したのでなく、牧草などに交つて、遠く萬里の波濤を超え來りて、絶東に新殖民地を造つたもので有る。

犬翠丸といふ植物は、日本に昔から有る、これは大犬翠丸よりも更に小さい、花も又見るに足りない、處が此草が犬翠丸に似て、更に大きいので、大犬と言つたので、此外に立犬の翠丸といふ歸化植物が有る、これは其性状が、犬や大犬の匍匐性なるに反し、草莖が立ち氣味で有るところから、立犬の翠丸と命けたので、益々怪しからぬ名ではないか、

嚴格なる家庭で、親達が説明に困るやうな名は、願はくば、遠慮して貰ひたい。

待宵草

長汀曲浦の松青き海邊や、欸乃緩やかに涼風を渡る川の汀、銀砂金砂の足を没する所に、俚俗月見草と呼ぶ、大きな黄色な四瓣の花が咲いて居るのを見る、普通のは一二尺、大きいのは四五尺に及ぶ、其大きいのは大待宵草と呼ぶので有る、共に外來歸化の民で有るが、日本に渡來したのは頗る古い、但し大待宵の方は、年代が遅れて居るやうで有る。花は六七月から九十月に度つて咲く、其名の待宵で有る如く、薄暮風涼を齎らす頃から咲くので、朝になると早く萎んで了ふ。其殊勝らしさは繪よりも更に趣きが深い。开して屢々水彩畫などに捉へられる花で有る

此花に来る蝶は、夕蛾の類で、蝶としては鋭い羽風で、時には紙より薄き花瓣を破る事が有る、然し此蛾が長い嘴吻を花底の蜜槽へ差込むて、夫から夫と戯むる、時、何時しか子を結ばして、夫が熟して飛ぶと忽ち無数の同族を蕃殖させる、盆栽には能く收め難いけれど、廣い庭には夕涼を追ふ時の眺めとなり、爽快の涼氣を添える。

姫酸模

姫酸模といふのは、蓼科の詰らぬ植物のやうて有るが、嚴寒に方つて其紅葉の美くしいのは、満目荒寥の折柄、眼もさめる斗り、丸て紅藍で染めたかと思はれる、尤も夏になると、葉も大きくなつて、高さが一尺以上にも及ぶ、姫どころか年増の藁が立つたので、甚だ賞美するには足らぬけれど、冬期は葉が殆んど地に蒔して居る、之に雅致の有る石でも扱

らつて、薄い白交趾の鉢へても栽えたなら、鏢銅壇上の珍とするに足るので有る。東京附近では代々木の停車場を降りて、新練兵場に添ひ、南の方へ行くと、田甫の畦に一面蕃殖して居る。

此草の日本へ渡來したのは、頗る古い、従つて從來は日本野生の植物として、立派な植物書にも記載されて居る、今日でも猶然く信じて居る學者も有るけれども、實際は外國からの歸化植物で有るといふ事が、近來發見されたので有る。此同屬のもので長葉羊蹄、亞米利加羊蹄など皆歸化植物で有るが、之は眺めに足りない。

姫小判草

これは禾本科の小さな草で、丈僅かに四五寸には足りない位、鮮綠色の優しい葉で、夫に扁平の小判形の實が下る、夏草の盆栽としては、暑を

忘れる位涼しい、宛ら稗詩が少し伸びて、夫に愛らしい實を結んだやうで有る、殊に此草は、秋から冬にかけて、白茶色に枯れた儘猶原形を失はないので、往々美しい色を染めて、西洋婦人の帽子の飾りなどに用ゐる、緑に染めて春初の盛花の粧飾に取交せてもよい。

此優しい草は、川崎附近の鐵道線路などに添ふて澤山ある、どうして種が飛んで来たものか、孰れ其徑路を調べたら、牧草などに交つて来たものであらう。斯ういふ優しい草は、猶各地に蕃殖さしたいもので有る。以上は實に歸化植物中、盆盎を飾るに足るもので有るが、猶此外に一寸數へて見ると、禾本科で鴨萱、長葉草、小姫ちば、大粟返り、犬麥、小糠草、白毛萱、萱科で、米粒昔荷、小昔荷、昔荷、菊科で姫昔逢、姫じよん、荒地野菊、洋種蒲公英、苧科で青苧、針苧、唇形科で姫踊子草、

之は元青山の墓地に在つたが、今は殆んど絶滅して、反つて仙臺の方に澤山ある、十字科の阿蘭陀がらしは、所謂バアセリーなるもので、西洋料理のツマに遣つた、其根を捨てたのが、終に野生のやうに蕃殖したので、市中の小溝などで往々見る。上野の不忍池畔などに多いのは、精養軒などで捨てたのから殖えたのであらう。

又車前で葉形が篋のやうになつて居る篋車前は、駒場の農科大學附近に野生する、錦葵科の冬葵は、三浦三崎へ行けば、到る處に生へて居る、野萵は藜科の植物で有るが、之も近來は非常に蕃殖して來た。鶴見生麥の海岸には蕃茄さへ野生して居るに至つては實に驚く、之は畠から脱出したのが元で有るが、野生で實が澤山生つて居る、是等は數代經たなら元の野生の原種に歸るかも知れない、實に西洋植物が、日本地を蠶食する勢は、殆んど意想の外で有る。

春の花

天の配劑

春と自然とは如何なる關係を持つてあらうか、之を研究する時は、極めて面白い趣味を得る。動物に於ては、冬期の厚き衣を脱いで、夏毛に移る支度をする、鶏ならば時に就いて羽を更へるといふ事になるが、動物は或る種の昆蟲の外には、凡て年々其生命を續ける、詰り何時でも存在して居るから。此外に格段の變化を見る事はないが、植物となると、常緑木の外は凡て枯る。假令根は生存して居ても、莖葉共に仆れて、地表を見渡した丈では死んだか生きたか解らないと言ふのが、嚴冬時の状態であるが、夫が一陽來復して、春風駘蕩の陽氣となると、忽ちムクムク

と芽を出して來て、どんな花が開いてあらうか、是が極めて面白いので有る。

春の花は凡てに於て小さい、可愛らしい物が多い、一寸庭を見渡した處で、福壽草、雪割草(スハマ)、菫、蒲公英、紫雲英、鈴衣草と言ふやうに、花の大きさは、比例に於て大きくとも、莖葉は皆可憐だ、所謂寸寸にして地に蒔いて開くといふので有る、然るに夏秋の花は概して丈が高い、春の如く殊勝らしいものを得るのが困難で有るといふのは、單に偶然とのみは言へない、其間に何等かの理由が無ければならぬので有る。之は外ではない、春百千草の花の咲く時には、萬木未だ葉を交さず、従つて太陽の光線を遮る者がないから能く地表を遍照する爲に、春の花は長く延ずとも、思ふ存分日光に浴せられるから、何も骨を折つて、日蔭

の桃の木(もも)のやうに、延(の)び上(あ)る必要(ひつたう)はないので有(あ)る。葉(すず)に其(その)日(ひ)蔭(かげ)の桃(もも)の木(き)なる者(もの)が、好(い)い例(れい)證(じょう)で、日(ひ)蔭(かげ)に居(ゐ)て光(くわう)線(せん)の直(ちよく)射(しゃ)を受(う)ける事(こと)が出來(でき)ぬ爲(ため)に、横(よこ)に張(は)るべき、枝(えだ)を張(は)らずに上(うへ)へ〜と伸(のび)て、金(か)火(ひ)箸(はし)のやうにヒヨロ長(なが)くなるので有(あ)る、此(この)理(り)屈(くつ)さへ心(こゝろ)得(え)て居(ゐ)れば、草(さう)木(もく)を養(やし)ふに、少(すこ)しも首(くび)を捻(ひね)るやうな事(こと)はない、是(こゝ)に於(お)いてか、果(くわい)樹(じゆ)は勿(も)論(ろん)庭(てい)木(ぼく)の植(うゑ)込(こ)みをするさへ、互(たが)の目(め)にするといふものは、單(たん)に體(てい)裁(さい)斗(たう)りてはない、光(くわう)線(せん)の徹(てつ)底(てい)を期(き)するからである、對(たい)生(せい)葉(えふ)が二(に)葉(えふ)相(あ)對(たい)し、四(よ)葉(えふ)參(さん)至(し)するものも必(ひつ)竟(けい)光(くわう)線(せん)を下の葉(えふ)に迄(まで)受(う)けたいからで、芭(ば)蕉(せう)葉(えふ)の風(かぜ)に裂(さ)けるものも、風(かぜ)を受(う)けて幹(みき)を折(を)るまじき用(よう)心(じん)のみならず、光(くわう)線(せん)を歡(くわん)迎(げい)する意(い)味(み)もあらう、此(こゝ)處(ち)に至(いた)ると互(たが)生(せい)葉(えふ)は葉(えふ)が互(たが)ひ違(ちが)ひになつて居(ゐ)るから、四(よ)葉(えふ)參(さん)至(し)せずとも、其(その)間(かん)隙(げき)から光(くわう)線(せん)を招(まね)く事(こと)が出來(でき)る。

其(その)外(ほか)金(か)剛(ごう)纂(さん)の葉(えふ)が掌(しょう)状(じやう)に缺(けつ)刻(こく)したり、長(なが)く大(おほ)きい必要(ひつたう)の有(あ)る葉(えふ)は特(とく)に羽(う)状(じやう)複(ふく)葉(えふ)にする、實(じつ)に天(てん)の配(はい)劑(ざい)妙(めう)なる哉(かな)て有(あ)る。

二葉相對四葉參至



多(おほ)い、之(これ)を夏(なつ)の花(はな)の赤(あか)勝(が)ち、秋(あき)の花(はな)の白(しろ)勝(が)ちに對(たい)照(しょう)すると、春(はる)は紅(こう)黃(わう)紫(し)白(はく)共(とも)、夫(それ)相(あ)當(たう)に多(おほ)く咲(さ)く、勿(も)論(ろん)春(はる)は花(はな)の多(おほ)い故(ゆゑ)に各(かく)種(しゆ)の色(いろ)を求(もと)め得(え)られるか

春の花の色

夫(それ)から春(はる)の花(はな)の色(いろ)に就(つ)いて研(けん)究(きゆう)して見(み)ると、各(かく)種(しゆ)の色(いろ)共(とも)に中(なか)々(た)數(かず)が



互生葉

も知れぬけれども、要するに春は葉よりも花の丈が高いから、如何なる色であらうとも直ぐに昆虫の眼に附くので、何も夏のやうに、萬緑叢中一點の紅を標榜して、蟲といふ戀人を招き寄せるといふ苦心は入らないからである。

科學者から言はせると、凡ての花の色は、植物自身の蕃殖を遂げる方法として、昆虫を招く爲で、決して人間の眼を慰める爲ではないと言つて居る。

成程先生方が講堂に立つて、然言はれる通り、昆虫は花底の蜜槽から、飴の如き蜜を吸ふべく、花の中に竄入する、其時に不知く觸角や頭の方に花粉を附けた儘、又他の蜜を尋ねて、浮氣をして飛んで歩く、すると甲の花粉が、乙の雌藥の柱頭に附著するので、花の生殖機能が遂げられ

る、昆虫は所謂月下氷人の役廻で有るが、蜜と言ふ飴を甜めさせられて未來永劫知らずく、媒介役を勤めるので、甚だ氣の好い役廻りて有る。斯う科學的から斗見たらば、遠山の雲か霞かと咲匂ふ花も、甚だ無趣味な者になるけれども、花は必ずしも、生殖機能の目的で斗り咲くのでは有るまい。

甚だ尾籠な話では有るが、凡て高等動物の生殖機關は、二種の用を足すやうに出來て居るから、花のみ獨、生殖一方の爲に咲くとなると、餘りに役が樂すぎる、造化の命としては、動物に對して、甚だ不公平では有るまいか、必ずしも他に何等かの用が有とすると、自然と調和するといふ事が、生殖より以上の大役であらう、詰り生殖といふ事も、絶えず此自然と調和し得られる爲を圖るから有るかも知れぬので有る。人間の眼を樂

しましめる爲などといふのは、餘りに我田引水て有る、此自然の調和を



苞をばさみ切りたる

福壽草

見て、偶々人類が歡樂するに過ぎぬのである。

是等の點から考へて見ると、春の花の容と色とは、春の氣象や山水などに對して、如何にもよい調和を得て居る事が自覺される、例へば櫻の花を眞夏の炎天に咲かしたら如何であらう、櫻狩も小袖幕も有つたものではない、到底日本道の精華などと誇る事は出来ないもので有る。

小さき草花

野に在る草は暫らく措いて、園養にしたり、盆栽にする春の花の中で小さき植物、福壽草、雪割草のやうに毛茛科に屬するものは、特に百花に魁けて開所から、凍附嚴冬の間、其殊勝らしき花芽は、保護機關として他の花よりも一層丈夫な苞を被つて居る、之が自然の陽氣に會して咲場合には、何等の支障も無いが、檐下や框の中へ入て、稍促開せしめると

いふ場合に、往々にして花が咲得れずして、腐朽して了ふ事がある。之を稱して花戸では花が退るといふ、之は詰り花の抽出力が弱のと、苞が寒氣を防ぐ爲に強靱に過るので有から、斯る場合には苞の先を鋭切て遣る、雪割草の如きは、全然苞を剥捨るので有る、但苞の先を切た位なら宜が、苞を剥捨た場合には、夜間露地に曝して置ては不可のは勿論で有る。

堇の促開

春の机邊を飾るに、堇より愛らしいのはない、堇の中で最も早く咲のは例の三色堇で有る、天使の顔其儘花の俤になつたといふ、泰西の神話を遺す所のパンジイで有るが、パンジイは花が大きい過て、且濃艶で有と、葉が菠薐草でても有かの如くなので、多の人は堇の部に入て取扱はない

實際又堇であつても、其優しく殊勝らしい趣がないから、堇の中の繼兒とされるも無理はない。

此堇以外には、誰も知る香堇、即ちヴァイオレットで有るが、僕は日本の堇の方が、遙かに上品で有ると思ふ、蝦夷堇は花は美しく香氣も高いが葉が大きい、肥後堇は葉が繊細で、花も香も共に賞すべき者で有るか、是等は堇中の最逸品と稱しても差支へ有るまい、其外相撲取花なる普通の堇でも、小堇でも、匂立壺でも、恐らく堇と名の附く者に、優しく愛らしくないものはない、且花の出るのも、割合に早いから、是等は春の花として、椽先の日當よい所で、促開せしめる事が出来る。手提温室といふやうな者を用れば勿論で有るが、夫でなくとも、極手軽い所では、金糸雀の箱の中へても入れて、硝子蓋をして遣ると、假令

火氣を通はせずとも、三月になれば必ず開く、但し其莖は前年によく肥



片明りに置かれたる草花

夫て箱の中へ入れて、天日を受けさせると、餘りに乾燥するから、鉢の

えさした者
て無ければ
ならぬ、瘦
せ枯たもの
では假令普
通の氣候で
あつても、
花は咲かぬ
ので有る。

中の土は、成る丈濕りを保つやうにするので有る、莖は花の前に植替へ
たり、水が過ぎたり、又日蔭に置くと、花が咲かずして、直ちに實を結
ぶ、所謂閉鎖花なる皮肉なものが出来るから、水を行るにも度を過ぎぬ
やうにするがよい。

窖咲の切花

切花を早く膨らませて、促開せしむるにも法が有る、温室促開は別とし
て御手製ても多少は、早開をさせる事が出来るので有る。

夫は桃なり櫻なり、蕾を多く附けて居る枝を切つて、之を花瓶に挿して
矢張硝子蓋の大きな箱へ入れて、日向へ出すので有るが、硝子は餘りに
日光が直射するから、磨硝子なら格別、然らずんば油紙を以て蓋の障子
を張る、醫者で油紙と音讀にする薄い油紙などは、之に逃へ向きで有る。

斯くして、朝から晩迄日の能く射る所へ出して置くので有るが（夜は勿論室内へ取入れる）中々此位の事では、容易に咲いて呉ない、其處で花を蒸風呂へ入れる格で、一日に三四回も、此切花に霧を吹いて遣る、スルト霧は箱の中の温熱に温められ、蒸して氤氳たる蒸氣となるから、花も浮かれて来ずには居ない、非常に早く花蕾を抽出して来るので有る。而し花が咲いてから、餘り多く水を與へると往々にして退けて了ふ虞が有るから、咲き出したら霧を吹かぬ者と思ふても宜しい。

皮肉な花

花といふものは、皆太陽の光熱を受けて開くので有るから、孰れも南を向いて咲く、夫の證據としては、一方片明りの所へ花を置けば、咲くのもく、皆光線の差す方へ斗り向く、莖の柔らかいものになると、今に

もあれ、前へのめるかと斗りになるので有る。丸て下手が活けた立花のやうな型になるので、花が如何に光熱を戀ひ憧れるかといふ事が解るが



脊向きの木蘭

此處に一つ最も皮肉な花が有る。夫は何處の庭園にも見える木蘭で有る。

屢次美術展覽會などで、木蘭の畫を見る事が有るが、有名の大衆が描い

たのでさへも、此花が南を向いて居る、詰り普通の花の如く咲いて居るけれども、木蘭は決して南向には咲かぬ、實に皮肉に北向に咲くのである。

詩宗白樂天が木蘭を詠じた詩にも

紫房日照臙脂拆 素艶風吹膩粉開

恠得獨饒脂粉態 木蘭曾作女郎來

とある丈で、又花曆百詠で詩名を擅まにした翁榴庵の詩にも

搖搖木草抹輕紅 一種瓊林趁曉風

晴雪堆花香更烈 寒雲擁樹色皆空

瑰奇似玉洵堪佩 氣味猶蘭迥不同

此德揚芬均絕俗 直應無匠此芳聚

とあるのみで、其他幾多の詩人俳客も、木蘭を諷誦したけれども「子にゆづる田畑も持ちて木蓮華」とか「もく／＼と木蓮開く雨間かな」とは言ふが、古來一として此花の皮肉に言ひ及んだものはない。

實に此花は必らず光熱に背いて開くといふ奇なる性質を持つて居る、夫なら日蔭を好むかといふに左様でない、實は餘りに光熱を喜ぶ爲に不知／＼脊向きになつて、日向ぼつこをするのである。

詰り此花は寒がりといふ理でも有るまいが、蕾が大きく且つ多いから、どうしても正面に光線を受けて居る丈では食ひ足らぬので、終に脊向きになつて脊から尻へかけて温めるのである、此木蘭の咲き誇る頃に場末の通りが／＼に注意して見られると、必ず此奇なる現象を見出すであらう。

國華

邦に國華あるは、泰西諸國皆然りて、日本にも特に國華といふ斷定を下したものはないが、「敷島の大和心を人間は朝日に匂ふ山櫻花」といふ歌の通り、櫻は不言不語の間に、立派に國華になつて居る、單に花とし言へば、櫻に極つて居るのでも解る、然るに此國華なるものが、大抵は春の花なものも、面白い現象で有る。

英國の薔薇、蘇國の薊、佛國の菖蒲の如き、皆中心から晩春、遅くなつた所で初夏に咲く者で有る。決して盛夏や秋の花などではない。

尤も薔薇にも春秋二季、或ひは四季咲も有る、薊も春夏秋と咲き續けるけれども、此二者共、花の見るべきは春で有る、殊に薔薇の一季咲といふものなどは、春に限つて居る。

斯の如く國華が春の花に限られて居るのは、春は花が多い爲でもあらうが、要するに春の花は悲觀的の色を示す者がない、卅は春で、其色富麗爛漫、極めて積極的で有るから、各國人の爲に自然春の花が選ばれたのであらう。

日本の櫻

日本で菊は、皇室の御紋章で有るが、櫻は慥かに日本の國華で有る。

國華は夫々其國民の氣風を代表して、國民の氣性と同化する花でなければならぬ。此處に於てか、英の薔薇は、其莊重なる氣概を表はし、佛の菖蒲は、浮華任俠なる國風を著はす、特に我邦の櫻に至りては、實に潔よき大和民族を表章し盡す者で有る。

東湖先生が所謂「天地正大氣、萃然鐘神州、秀爲富嶽靈、巍巍聳千秋、

注爲大瀛水、洋洋環八洲、發爲萬朶櫻、衆芳難與儔」とある如く、實に大和民族の正大の氣は、此萬朶の櫻に現はれたので有る。櫻の花が斯く國民の氣性に迎合したといふのは、此花が一朝春風の駘蕩に逢へば忽ちにして連天の雪となり、散りも始めず、咲きも残らず、十里の長堤、一目千本の眺め、凡て花ならざるは無く、天地の限りを花にして了ふので有るが、七日を俟たで、夜半の嵐に襲はるゝ時は、昨日の榮華は、只幻の夢の如く、萎れながらも絶り附く未練はなく、花吹雪となり、飛ぶ胡蝶となつて散り盡すので有る、此潔よい、未練心の無いといふのが、實に我國民の氣性を表はして居る、其爲でもあらうか、此櫻の花が何時とはなしに、國民の最も愛ていつくしむ花となつたので、花見と言へば全國の人心狂するが如く、楽しく喜ばしく一日の行樂を盡

すので、是斗は我國民誰一人として左袒せぬ者はない。如何なる冷酷な人でも、櫻に對する間は必ず其血脈を暖めるので有る。昔は單に花とのみ呼ぶ時は梅を指した者で、百花の魁て有る所から花の總稱を獨占したのであるが、下つて平城天皇の頃には、何時とはなしに櫻を單に花と呼ぶやうになつた、天皇御製の詩さへ人口に膾炙されて居る。

昔在_二幽谷下_一 光華照_二四方_一 忽逢_二攀折客_一

含_レ笑_二亘_二三陽_一 送_レ氣_二時_二多少_一 垂陰_二枝_二短長_一

如何_レ此一物 擅_二美_二九春場_一

が夫て有る。

然して櫻を國華とするに、動かす可らざる理由は、此木が我日本の外、

他國には分布されて居ない事である。

菖蒲や、薔薇や、薊や、洋の東西何處の國にも分布されて居るから、國華として占有するには、少し條件が缺けるやうな氣かするが、我櫻に至つては、全く日本特有である、尤も近頃西北利亞邊に、櫻の野生を發見したといふ説もあるが、假令有つたにしても、夫は言ふに足らぬので、依然本邦の獨占といふに差支ない。

此外に櫻は我歴史と離る可らざる深い關係が有る、「歌書よりも軍書に悲し吉野山」の櫻は、吾人臣民たる者の、最も感慨に堪へざる所で、此山の此花を仰いで涙を垂れざる者は、我大和民族ではない、更に兒島高德が赤い心を墨で書いたのも櫻樹であるし、「吹く風を勿來の關」の感慨も櫻である。

櫻に就いての故事逸話を尋ねたなら、僕を更ゆるとも盡ないので、我邦の花弁中櫻の如く國民と密接の關係を持つ花はないから、之を國華とするに何人も異存は有るまい、國一致とは實に此事である。

流れ来る浪は櫻の花なれば折らてさだめん事ぞうきたる
風をいたみ響の灘を通る日も岸の櫻にめかれやはする
立歸り猶見て行ん櫻花こゝるもの里の匂ふ盛りは
雲かゝる那智の高れに風吹けば花貫き下す瀧の白糸
浪清き玉島川にうつり來て春の光も花に見えけり

秋の園生

花の色

花に紅黄紫白様々の色があるのは何の爲であらうか、植物學者から言はせたならば、殆んど蒼緑に限られたる葉と區別して、最も能く昆蟲の眼を牽き易い爲に、美麗な色を咲かせるので有る。前段にもいふ如く昆蟲は何の爲に花の色を愛でるかといふと、色によつて花の有る所を知り、花底に穿入して蜜槽の甘露を吸ふ爲で有る。昆蟲は實に自己の生存の爲に花を尋ねて居るので、虻蝶の紛々として飛ぶのは、決して人の眼を喜ばせる爲ではなく、全く自活の爲で有る。然るに昆蟲が花の底へ入る結果、所謂花粉なるものを、羽毛に附著させて、甲花から乙花へと送るので

て知らず、花と花との媒介をして、完全に實を結ばせるといふので有る。

惟ふに昆蟲が螟蟲毛蟲の幼蟲時代に、散々草木の葉を蝕害した罪亡しに月下氷人たるかも知れない。即ち昆蟲となると、花と一種の共同生活を營むて居るやうな理になるので、切つても切れぬ縁だ、昆蟲と花との孰れを缺いても双方共に生存する事は出来無くなる。

然し之は偶然の結果が然らしめたので、恐く植物學者が常に言ふ如く、双方が其一方の爲に、世の中に生れて來たのではあるまい。若し然りとすると、吾人類は、花粉の人爲的媒助を行ふし、果物の種子を、知らずく放散させて、蕃殖の助をするから、人間も花の爲に生れて來たといふ事になる、如此馬鹿くしい事はない。

然し理屈は兎に角として、實際其季節季節によつて、眼に付き易い花の色が咲くので有る、春は各種の色が多く夏は紅、白、黄、秋は赤、黄、紫等て有る、殊に夜咲く花は、殆んど白か黄(黄色は夜目に白と過たる)に限られて居るやうで、烏瓜、蒲蘆、夜會草、西洋睡蓮(夜に限り開花する品種)待宵草、夕化粧等は夫て有る。殊に著しい例は、俗に華魁草と呼ばれ、西洋ではスパイダア、ブランドと花の形によつて命けられる植物の如きは、蕾の中は紅色で有りながら、夕暮から開くと白くなる。是等は黒暗々たる闇にも、灰白く自己を標榜するので、従つて蛾が其色香に迷つて、蠟集して來るのである。

畏友川上農學士の著はされた『はな』といふ書に、四季に頒つて花の色を計上されて有る、元より只思ひ泛べた儘を記されたので有るから、之て

花を盡して居るのではない、又僕が前にいふ所とは異なるが、其一例として抄記すると

- | | | | | | |
|---|---|------|------|------|-----|
| 白 | 花 | 春…十五 | 夏…十五 | 秋…十四 | 冬…九 |
| 黄 | 花 | 春…十一 | 夏…十一 | 秋…六 | 冬…四 |
| 赤 | 花 | 春…十四 | 夏…十四 | 秋…十四 | 冬…四 |
| 紫 | 花 | 春…五 | 夏…六 | 秋…二 | |
| 青 | 花 | | | | |

春……二 夏……二 秋……三
 といふ割合で有る、元より之に就いては、猶仔細に精査したならば、面白比例を見るであらうと思ふが、是等は研究の資となる事が多い。

七草とは何ぞ

秋の七草といふ事は、古へより人口に膾炙して居る、然し八千草の中から殊に七種の草を選んだ趣意は一向に解らぬ、殊に此七草の品目に附いては、古來様々の説が有るので、必ずしも断定するといふ事は困難であるが、要するに似たり寄つたりの者であるから、暫く萬葉に在る山上憶良朝臣の七草の歌といふのに基づくと、

芽之花乎花葛花瞿麥之花 姫部志又藤袴朝貌之花
 の七種で、萱科の萩と葛、禾本科の尾花、石竹科の瞿麥敗醬科の姫部志

菊科の藤袴夫に朝貌で有るが、朝顔は今の牽牛花で有るかどうか、疑問とせねばならぬ、槿花か桔梗か牽牛花かとの三問題が、今日に至るも解決されぬから是は別として置いて、他の六草で見る時は、凡て京都附近の原野に自生するもので、嵯峨野の古への如きは、是等の草が、己が自由に咲いて居たのであらう、従つて山上憶良が七種の秋草を選ぶにも、御手近の京都附近で指を屈したので、廣く當時の野草を研究したのでは有るまい、況して本草の學が開けて居た時代でもないから、憶良朝臣が眼で見ると、漫然屈指して歌に詠むだに過ぎぬが、然し是等の花はいづれも花の色が濃厚でない、或ひは濃くとも少さい、夫に草莖の性質が葛の如く蔓で有つたり、萩瞿麥尾花の如く仆れ氣味であつたり、假令垂直に立つ者としても、藤袴姫部志の如く、淡泊な色で、凡ての野趣綿渺たる

寂寞の韻致を有して居るといふ事は、秋の七草が今日に迄膾炙され、賞美される理由であるが、必ずしも以上の七草は、秋草中の最美のもので有るとは言はれぬ、花の美を以てしたならば、七草を凌ぐものは屈指に違あらずて有るが、詩趣油然として湧くといふ點に附いては、七草に及ぶものはないので有る。

秋草の盆栽は何處に在りや

今日机邊の眺矚として、秋草の盆栽を購ふには、何處へ行つたらよいか、又何人が造出すかといふと、普通の鉢植ならば縁日でも賣つて居る然し夫は只鉢植といふに過ぎぬので、詩趣津津たる盆栽は、到底植木屋では求め得られぬので有る。彼等の造る秋草なる者は、濫に色の配合を苦心する、夫も俗悪なる色で、假令ば現機關の招牌畫のやうな色合をの

み求める爲に、色と色との配合が餘りに強い。姫雁來や、天竺葵や、金蓮花のやうな者を、蒔繪萩や絹薄に交えるので、和洋混淆して、殆んど繪の具皿を打撒けたらうな體裁で有る、开して夫の賣行がよいので有るか、植木屋としては何も苦しむて俗流に投ぜざる秋草の盆栽を造る必要がない。従つて見るべき價値の有る秋草盆栽は亡なつて了つたので有る。

賣物に無いとすると、自分が造らねばならぬ、夫にはどうして丈を短かくして、花を咲かせ得られるであらうか、何人でも先づ胸に泛ぶ問題で有る。然し夫は秘傳も機微もない、面倒を見て扞茅にさへすればよいので有る。

扞茅は女子供にも出来る

扞芽さしめで盆栽ぼんさいを造るには、先づ薄盤うすはたのやうな平たい鉢はちに、右又は左寄の一
 方を稍小高く土を盛り、他方は鉢の椽へよりも低くするのである。
 斯うして盥たらひの中へ鉢の中央迄浸るやうに水を入れ、夫へ鉢を入れて、水を
 土一杯に浸潤しんじゆんさせるので有る、若し斯せずして、水を上からかけると、
 土を流すと共に、地表をのみ固くして了ふ虞おそれが有る。
 これは夏の始めに種々の草が、充分に芽を延した頃行ふ法で、其草の芽
 を一二寸程摘むて、適宜に扞すので、當分は風通しのよい日蔭に置くが、
 愈新根を下し始めたならば、日向へ出して、思ふ儘に日射を受けさせ
 るので有る。然る時は其葉が損傷する虞おそれが有るかも知れぬが、夫は水が
 充分に行渡らぬ爲て、詰りは此方の無性から起るので有る。
 敗醬さいじやう、瞿麥じやくまく、菘はぎ、藤袴ふぢはかまなどは、此方法で極めて矮こせ麗れいた小さい植物を造る

事が出来る、但し葛は扞挿さしきて活いくけれども、花を咲かせるには實に困難
 て有る。恐くは斯くして咲かした者は有るまいから、葛の代りに同じく
 野草で、均しく荳科なる姫葛ひめくづ、啖切豆たんきりまめなどを用ゐるので有る。
 尾花おなばな、則ち芒すすきは、絲芒いんすきの絲の如くに優よしく媚なまめくものを用ゐるので有る、
 所謂鬼芒いひゆるは、盆栽中の風情にならない。肥料は油滓あぶらかすの窒素ちつそ分に富とむ者と
 骨粉こつぽんの磷酸りんさんに豊ゆたかなる者を用ゐて、葉を美びならしむると共に、花を簇むらせ
 るやうにする。或ひは肥料を與へたら丈が延びはしまいかと心配するて
 あらうが、其爲の磷酸性の肥料で、幾分か抑制する氣味も有るし、若し
 餘り伸長するやうならば、早くに其芽先を摘むがよい。
 思ひ草とは何

歌に思ひ草といふのが有る。

道の邊の尾花が下の思ひ草

今更になど物を思はん

と通具卿に詠ぜられて、非常に有名になつたが、而し歌學者の多くは、今日と雖も、實際其實物を知るまい、従つて蘭草といひ、紫苑といひ、龍膽といふ説が有る、开して大體に於て龍膽の異名といふ事に歸着したらしいので有るが、實は思ひ草なる植物は外に歴然として存じて居るのて有る。

詞林採集に『家には龍膽を思ひ草と被仰るゝの上は可信用之云々』と、無理強に龍膽にして丁つたやうて有るが夫は甚だ酷て有る。

通具卿の思ひ草の歌に『道の邊の尾花が下の』と、場所を特定して有るのには或ひは詞華の形容かとも思へるけれども、又虚心にして考へると殊

更に特定したといふには、何か特定すべき理由が無くばならぬ。思ひ草にして龍膽なれば、尾花の下に限らず、瞿麥、蘭草の間からでも生へる特に尾花の芒とは限らぬので有る。然るに眞實の思ひ草なる物は、芒の根元でなくては生長せぬ。何故かといふと、夫は芒の寄生植物で、芒の根から營養分を吸収して生長する南蠻烟管といふもので、芒のみには非ず。此植物の寄主として知られて居るのは、甘蔗、陸稻、茗荷等十三種有るが、芒に寄生するのが古くから知られても居たし、極めて詩的でも有る。

此植物の形はといふと、普通に葉と見える葉もなく、恰も土筆のやうにニヨキ／＼と芒の根方から地を抽くので、其梢が烟管の火皿のやうに、著るしく一方に曲つて居る、开して其曲つた所が花で有る。

花の色に濃紫、淡黄、純白、淡紅色等有る、東京附近でも、大宮公園に生へるのは濃紫色で、赤羽邊の色が薄い。

此草は芒といふ生物に寄生する植物で有るから、寄主の芒ぐるみ探つて来れば知らず、花だけ探つて来ては到底活かない、其處で僕等は常に其種子を取つて、前記の秋草の盆栽中に在る糸芒の根へ蒔く、其時期は五月の中旬以後で、種子が灰の如くに細かいから注意せぬと風に散らされる、さればと言つて餘り深いと、腐敗して了ふ、要は毛の如き芒の鬚根に接觸するやうでさへあれば宜しい。

斯して其種子は芒の根元で發育して、退々寄主の根へ食ひ入り、芒の上前を跳ねては生長するので、全く芒の爲には獅子身中の虫の感がするであらう。若し此寄生植物が打勝ば芒は枯死の運命に逢著せねばならぬの

である

此草が盆栽中に在つて花を開のは、九月下旬から十月であるから、丁度秋草の盛の間、併せて此畸形にして風流なる花を眺める事が出来る。

且幸ひな事には、此草は一年生で有るから、例令芒の根が荒されたにしても、翌年迄には又恢復して、再び思ひ草を播く事が出来るので有る。

秋の庭いじり

彼岸の種蒔といふ事は、何人も知つて居る事で、春秋二季の彼岸は園藝家にとつて大切な時期で有る、殊に秋の彼岸には、來春咲くべき植物を播種したり、球根類の放下掘上等を行ふので、鋤と鍬とは眼の廻るやうに忙がしい、今日になつて菊作らうと思ひけりて、我人共に春の花の美を喜んで、今年こそは〜と思ふが、昨今の季節になると兎角臆怯になる。

然し秋の種蒔は、春の夫よりも猶簡易であるといふのは、秋蒔の草は凌冬性で、寒さにめげぬ程だから、萌生の中から丈夫で有る。殊に秋は夏の初頃と違つて陰湿でない、空氣が乾燥になる斗りて有るから、素人が水を過剰にしても、腐れる憂ひが少ない。これは我等素人には最も都合がよいので有る。

苗床の作り方は、適宜の大きさに木框(底の無き)を拵へて其底に芥土を入れ、上層に能く篩ひにかけた軽い土を入れる、开して適宜に種を蒔くのである。

瞿麥罌粟のやうなものは、殊に秋蒔がよいのである、但し罌粟は移植を喜ばぬから、始めより鉢又は定植地に蒔くがよい。

種子を蒔くの秘訣といへば、只浅く蒔くといふ一點に歸着するので、浅

きに失するとも深きに過ぐる勿れといふのは、播種の金言である。勿論餘りに地上に露出する時は、種子の萌芽力を弱めるから、其場合には薄く砂か藁灰のやうなものを振りかけて置くがよい。开して西洋の法

によると、貝割後一週日にして移植を始め、移植に移植を重ねて苗を丈夫にするけれども、日本の植物殊に我々素人が行ふには、少なくとも成葉が二三枚出る迄放置して、夫から移植するがよい。

高山植物の實生法

此頃非常な勢を以て、高山植物が流行し始めた、裾模様にも、半襟にも下駄の鼻緒にも、指環や金具にも、盛んに此模様を應用する程に、流行の趨勢を現して來た。縁日でさへ植木壇の呼び者となつたので有る、然るに此高山植物たるや、盛夏三伏の候に、穢氣磅礴たる不斷の雪の邊か

ら採つて来て、苦熱燬くが如き下界へ放擲するので有るから、大抵の人は枯して了ふ、例令今年は持つにしても、來年になると必ず枯れる。之を防ぐには實生法を行ふより外はない。

秋口山から十分熟した種子を取つて來るか、然らざれば自家の盆中で穰たものを初秋の季候になつて、植木鉢へ放下するので、播種法は普通の者と少しも變りはない、只鉢の上から水を注がずに、いつでも鉢の底から水を引かせるやうにする、詰り上から灌水する爲に、微細な種子の散逸するを恐れるからで、無論雨に打たせるは宜しくない。

高山植物は高山にあつて、短時日の間に芽を出し、花咲き穰る、極めて忙しいない植物で有るから、種子の發芽も早い、其代り脆弱なもので、人間で言つたら蒲柳の質といふので有るから、荒い風にも當られぬ側の代物

であるさればと言つて、濫に大切にすると、益々弱くなるから發芽後は日にも當るし、風にも吹かせる、只篠突くやうな雨に逢はせると、小植物が消飛ぶといふ虞がある、夫と禁物のは雨の車であるから、木の下軒下などは、力めて避けるやうにする。

猶外に高山植物の實生に忌むべきは過剰の濕氣で、此爲に折角生へた萌芽を擧げて腐敗せしむる事が屢々有る。

天下の稀品と言はれる裏白金梅などは、下界に於ては稀品でも何でもない、實生によつてドシ／＼生へる、千の粒子から千の新植物が出来るが、陰濕にすると一朝にして腐敗して了ふ、僕は裏白金梅の播種について、聊か自得した積で居た、其爲に毎年秋期の乾燥期に播くのを、或年輕々しく暑中に替いた爲に、五六日間の霖雨と不時の冷氣とで大半腐敗させ

て了つた。生兵法大疵の基とは是であらう。

食蟲植物の播種

彼の聲で蜥蜴食ふか杜鵑、美しい花が蟲を捕食すると聞いては、興さめる心地がするが其捕食運動が面白いのと形が小さくて且つ畸形なのが、中々に風致が有る。

全體植物で有りながら、何の爲に蟲を捕食するかといふに、根の組織が先天的不完全の爲に、十分に自己を養ふ丈の營養を根から攝取する事が出来ぬ爲、特別の構造になる葉に捕蟲機關を具へて居るので有る。

是等の植物の中で、誰も知るのは毛氈苔、之には小毛氈といふ赤い花のと長葉毛氈苔といふのが有る、花の美しいのは蟲取堇、庚申草、水草では狸藻、貉藻、野狸藻其外茅薺草、耳搔草と幾種類もあるが、水草の實

生は僕に経験はないが、其外のもものは、皆實生を試みた、夫も丁度昨今の時期である。

僕は薄く紗羅を切つて水盤に入れて、其夷き表面に、毛氈苔耳搔草の各種類を盡して蒔いて見た、無論只種子を蒔いたのみで、一掴みの砂も土も交えない、夫でも種子は紗羅の織緯の間へ竄入して、直に芽を吹くので、毛氈苔は宛ら蟻の這ふが如き形で、一杯に生へる、耳搔草は僅か

生へたけれども、翌年に至つて始めて完全したので有る。全體毛氈苔は消え易い、殊に小毛氈は悪いので有るが實生にしたものは成績が頗ぶる良好だ、夫て小さき葉で有りながら、矢張體相應な運動はするので小さいなりに小さい昆蟲を葉面の毛で押へて、片端から生血を吸つて了ふ、若し葉の大きさと昆蟲の大きさと比較て言つたら五尺大の葉

があつたら、人間を捕捉して、ムシヤ〜食べて了ふに違なひい、實に恐ろしい植物で有る。

狸藻の水盤

狸藻といふのは、水中に居て、其枝の叉から特別の組織を有する袋の口をあけて、水中の小蟲を捉へるので、袋の中が魚を捕る筈のやうになつて居るから、入る事は自由でも、出る事は出来ない、一度此處へ入つた俘虜は、枯れ〜の死骸にならねば出る事は出来ぬので有る、小さき水中の蟲が、目斑魚などに追はれて、能き隠れ家と思つて、此袋の口に飛び込むのだが、最期、毒の有る針が逆まに生へて居て、蟲は蝟のやうに刺される、开して見る間に五體を消化されて了ふので有る。
此面白き運動は机の上に置けるやうな、小さき水盤でも見られるが、然

し矢張秋口に草を採集して来て、水盤に放つがいゝ。

盛夏の候鴻の臺市河附近の小溝を涉ると、黄金の葩が、恰も緒占の狸の形をして咲いて居るので有る。

要するに植木屋の造つた者を買ふのは、貰ひ子をするやうなもので苦辛して育てた實子なる實生植物のやうに深い愛情が起らぬから、興味が非常に浅いのは、實に僕一人の感想のみではない。

千草百草

秋草の盆栽

秋の千草の種々に咲き亂れて、露も溢さぬ風情を、朝夕の眺めにするには市内熱鬧の地にありては、只一の盆栽に因るの外はない、譬へば庭園ありとしても、十歩に足らぬ空地で、四方を板塀や亞鉛張て圍はれて居ては到底盆栽に於ける如き風致を描く事は出来ない。

開て秋草の盆栽の要は、單に花の美を賞するが主眼ではなく、一盆の裡に秋の野の風情を描き出すのが目的である、敢て秋草に限らず、凡ての盆栽は皆其傾向を有するけれども、牡丹芍薬、百合、花菖蒲といふやうなものになると、風情は第二で、重きを花に置くのであるが、秋草は畫

となつても、蕭條たる風致を感らにして居るのは、何派の畫に於ても然りである、況して盆栽に於てをや、之を植ゑるには、當初から此覺悟を以てせねばならぬ。

鉢

秋草の盆栽に用ふる鉢はどうかといふと、蔓龍膽や葛のやうな蔓物ならば無論懸崖として立方形か圓筒形のものに限るけれども、然らずして普通の植込であつたら、無論平鉢の成るたけ丈の低いのがよい、丈が高いと鉢の側面が邪魔になつて、折角の風致を傷けるから、出来るだけ鉢の高さを低くする事である、圓形、楕圓形、長方形等は、各好む處に従ふべして、各自の都合にするがよい。

夫から鉢は何焼がよいかといふと、ヤレ古渡の交趾だとか、ソレ何代の

青磁だとか、種々贅澤を言はれるけれども、夫は徒らに紙幣の張子を拵へるやうなもので、只金銀の贅を衒ふに過ぎぬ、斯る無風流な事は、此園藝の道には無いのである、反つて俗臭紛々で、山野綿渺の風致も、詩趣の横溢も、何處へか飛んで行つて了ふ譯であるから、吾人は斯る無風流な徒と語る事を好まぬ、吾人の望むところは、兎に角壇上の眺めにするるのであるから、まさか素焼の瓦鉢でも困るけれども、此頭流行の今戸や尾州邊の朱泥紫泥の模擬物、或ひは三州邊から來る安い支那まがひの陶器鉢を用ゐたいと思ふ、先づ大が直径一尺六寸の三組物で、小賣値段が組一圓六十錢位、これであつたら最上と思ふ、これ以上には新渡も

用具

秋草の盆栽を造るに、別に用具なども入らぬけれども、同じくは有るに越す事はない、而して秋草に限らず、凡ての盆栽に必要であるから、調べて置くのも悪くはない。

鉢は鉢の地表を均す爲の用具で、充分を言へば、大中小三通りであるけれども、中が一つあれば用が足りる、其形は普通の庭師の用ふる鉢の形でよいが、其直径は一吋五分乃至二吋である。之を以て鉢の隅や、植込みの間など、手では思ふやうにならぬ處を均すに用ひる。篩は一分目位で大さ味噌漉程の一つと、夫よりも目の細いの一つと、此二つあれば足りるので、夫以上は幾通りでも好み次第であるが要するに秋草などは、培養困難なものでないから、篩なども左程吟味する必要はない。

砂すなは盆石ぼんせきの方ほうなどで用もちゐる灰はいのやうな細こまかいものではない、胡麻粒ごまつぶよりも今少いますこし荒あらいもので、白しろいのは花崗岩くわこうがんの細末さいまつになつたもの、黒くろいのは極細ごくこまかい砂利じかりである、これは植込うえこみの都合つがうで、秋草あきくさの植うゑある地ちを島山しまやまに見立みだてた場合ばあひに、島山しまやま以外いげいを水みづと見みて白石しろいしを布しくか、又は鉢はちが白薬しろくすりである時じ分に、對照たいしやう上黒石じやうくろいしを使つかふか、孰いづれかの場合ばあひに應用おうようするのである。

石いしは必かならずしも必要ひつたうといふのではないが、野中のなかの拵石すていしなどの見立みだてをする時ときに、是非ぜいひ無なくてならぬから、大小高低だいせうかうてい取り交ませて四よつ五ごつ用意よういすべきである。其外そのほかは勿論もちろんピンセットなども用意よういするに越こす事ことはない。

植土うえつち

植土うえつちは普通木ふつうきの葉はの腐くさつた土つちに黒土くろつちを交まぜ和あせ、多少砂せうすなを加くはへて置おけば殆たいていんど何なににてもよいけれども、山やまを拵こしらへたり、苔こけを附つけたりする必要上ひつたうじやう

俗ぞくにケト土けつちと呼ばよばれる泥炭ヒートを備そなへて置おけば猶なほ更さらよい、此土このつちは乾かくと固かたくなるけれど、水みづをかけると、忽たちまち元の通とほり柔やらかになるのみならず、水みづが過すぎても割われるといふ憂うれひがない。

灌水器くわんすいき

灌水器くわんすいきといふても、何なにも噴霧器ふんむきやうな大掛おほがかりのものではない、普通ふつうの如ごとく露ろの成なるべく穴あなの小ちひいものがあればよい、其外そのほかに霧噴きりふきであるが、是これも縁日えんじちの鐵葉細工てつえきさいくで澤山たくさんである。

植方うえかた

道具立どうぐだてが濟すむだら、彌栽いよくさい植しよくに取り懸かるのであるが、先まづ缺かきて無用むいようの小根こねを剪きり捨すて、豫あらかじ草くさの形かたちを拵こしらえて置おいて、一方はうには鉢はちの底そこへ瓦片かばらけか土釜どがま炭すみの皮かはを布しいて、排水はいすいを良好りやうこうにし、其上そのうへは篩ふるの中なかの疎あら土塊つちくれを入れ夫それか

ら能く篩過した合土を薄く布、夫へ根を落附けて植迄むのである。
 其植方も假令何種植込むにしても鉢一杯では趣きがない少くも鉢の三分
 通は明けて置かねばならぬ、夫以上の餘地は多いだけよいけれど、無意
 味に明いて居ては、反て空地が目立つから、大抵ならば三分四分といふ
 處にして置く、よし如何なる珍木を持つて來ても、植方が悪いと其珍木
 の本領を發揮する事が出来ぬ。況して野原の八千草に於てをや、只植方
 の技術一つで、渺茫たる花野ともなり、亂雑なる植溜ともなるのである。

草の種々

秋草の盆栽には何がよいかといふと、先づ七草を始めとして、一枝黄花
 龍膽、蔓龍膽、胡黃連、野百合、桔梗、思ひ草、楊柳菜、知風菜、野菊
 蘆、鹽釜菊、血葎挿、千屈菜、山梗菜、其他枚舉に遑なしてある。

苔

砂や小砂礫の代りに苔を盤中に附ける場合に、屋遊でも杉苔の若芽
 ても、夫を丁寧に附けたら、苔と苔との合せ目に小砂礫を撒くのがよろ
 しい、如其すると、今附けた苔でも、自然に附けたやうに見えるのみな
 らず、砂礫と苔との配合が頗ぶる美である。これは狭量な盆石者流が、
 口傳など唱へる處である。

水盤物

七草は水盤物として作れぬ事はないけれども、其性質が全く水中のもの
 て無いから、水盤としては不自然を免かれぬ。寧ろ水盤を拵へるなら、
 矢張水邊の草を用ゐるが至當であらう。

葦、山梗菜また楊柳菜などは水草といふ譯ではないが、水邊に成育する

もので、其性水を恐れぬのみならず、薄い水盤に植えるのが、反つて自然に適つて居るから、是等を拉致するが宜しい、然し水邊の草は、總じて大きく成り易いから成るべく、夫を縮める必要がある、夫には水を切らすのも肝要ではあるが、再三芽を摘まねばならぬ、夫も伸び過ぎたのを摘むては葉に遅いのみならず、形容を損して、風致を殺ぐから、第一回には芽が出てまだ三寸位の時に、梢頭を七八分乃至一寸位摘み、二回三回には、新芽の二寸位の時に摘む、斯くして三回位施せば足りる、而して其摘むだ芽も、決して無駄になるのではない、直ぐ挿して置けば、矢張今年花が咲くのである。

水盤物の肥料には、油滓か乾鰹がよいけれども、成るべくは土拵への時に交せて置いて、後から鉢の中へは遣らぬ方がよい、薄い水盤であるか

ら、肥料を入れると、勢ひ鉢の中を汚す様な事になる。

龍膽

龍膽は秋草の中でも、兎角工合の悪いもので、捨植にして置いても花は咲くが、下葉が皆上つて了ふ、下葉が上つて丈が伸びては、殆んど何等の価値もない、野生のですらも此弊があるのであるから、況して鉢植にしたのでは益其傾きを生じる、水が過ぎれば伸び過ぎるし、水を切らせば、益々下葉が上るのみならず、葉が黄色になつて了ふ、誠に始末が悪い。斯ういふのは、早く芽を切つて挿すがよい、挿芽にしたのは、大に此弊を極ふ事が出来る、然らざれば鉢のまゝ、庭の雑草の間に入れて成るべく根元に日を直射せぬやうにするがよい。

一種姫龍膽とても言ふべきものが、武州の戸塚在から金澤偕はは三浦半

島にかけて間々ある、これは丈が一尺位で、下葉が少しも上らぬから
盆栽には適合である。夫から朝熊龍膽などは丈が低いけれども、到る處
に生へて居る譯でないから、一寸得難い。

蔓龍膽は花よりも寧ろ子を見るので、秋の末になつて、紅玉のやうな實
が點々として細い蔓に下るのは、一の見物であるけれど、これは鉢植に
するのが、割合ひに困難である、庭の木陰ならば、始末にならぬ程蕃殖
するけれど、鉢だと兎角瘦せが来る、必竟鉢であると、勢植木壇などへ
載せぬから、どうしても日射が強い譯である、これは矢張鉢のまゝ、陰
濕ならぬ木陰に置くのがよい。

野菊

野菊は花戸では専ら鷄兒腸紺菊等の事をいふけれども、夫でなく、龍腦

菊の事で、東京附近到る處にある。又油菊、野路菊、汐菊、磯菊も皆野
生の菊であるけれども、汐菊、磯菊を除いて他のものは、重に懸崖とし
て造るのがよい、或ひは外の秋草の植込にもするけれども、慥に菊だけ
を造る方が風致に富む。然し野菊は挿芽にするよりも實生にした方が枝
振に風致があるのみならず、時に變りが出るから樂みが深い。其中で盆
栽として最も見るべく、又最も香の高いのは龍腦菊である、富士の裾野
は多く此菊を以て充されて居る。

胡黄連

胡黄連は田舎などで、應急療法として腹痛を治するに用ゐるもので、龍
膽のやうな小さな花が咲く、且つ草の丈三四寸位でもあるから、盆栽に
は最もよい、只憾むらくは一年草であるから、年々實を蒔かねばならぬ

曾て或盆栽師が此草四五莖を植えて、四圓とか五圓とか言つて居たが、如何に盆栽の技術を買ふとは言へ、一年切のものをさりとては残酷を極めたものである、買つた人は一年とは知らず、來年も此通りに芽を出すと思ふのであるから、罪が深い。

盆栽の害虫は澤山ある、蚜蟲、蟻、介殼蟲（果樹に多し）毛蟲など種々あるけれども、蛭蝓ほど恐ろしいのはない、就中黒い小さな蛭蝓、被害にかゝると、小さな新芽などは、一夜にして食ひ盡されて了ふ、夫てどんな處に鉢を置いて、夜になると出て來るのであるから驅除の法が附かない、之を防ぐには、馬鈴薯の皮を剥いて薄く切つて、鉢の一隅へ置くに限る、斯すると蛭蝓は其好物にほだされて、食ひ盡すまで粘着して居るから、其處を一々取り捨てるのである。

秋の彼岸

播種期

お彼岸の種蒔と言ふ事は、昔も今も變りはない、春秋二期の彼岸會前後は、都鄙共に播種期と定められて居るが、氣候の遅速によつて多少此時期を變更せねばならず、土地の寒温に従つて、幾多の斟酌あるは勿論である、例へば秋の彼岸に播種をするとしても、氣候が今年に限つて餘りに暑ければ、十日位は遅らせるとか、又寒い地方ならば、東京附近よりも、十日と十五日と早くすると云ふやうな手心がある、寒い高緯度の地方では、春の花は遅く、秋の花は早いのであるから、其積で著手せねばならぬ。此位の事は誰でも知つて居ながら、つい忘れて臍を噛む事が屢

々ある。

花の趣味

人間といふものは、何か一つ道樂はある。「我にはゆるせ敷島の道」といふ方は、寧ろ道樂以上のものであるが、誰でも一つ以上の道樂を持つて居るとすると、其道樂の中で、一番手軽で、且つ高尙で、开して何人にも了解されて、樂しみを共にする事の出来る道樂は、天下只此ばかりである、加之ならず、或道樂は必ず他の或人に嫌はれるけれども、花ばかりは襖褌の小兒にさへ好まれるのであるから、花の趣味といふものは、先天的生れながらにして人類に解されて居るのである。遠く未開の時代に於てすら、天佃女命が石松を飾りとしたり、南洋の土人の椰子の葉を飾にするなど、いづれも草木の趣味を解して居た證左の一端である。

る。

播種箱

此趣味ある花を造るには、どうするかといふと、分蘖や扦插もあるけれども、實生が一番よい、今此秋季に方りて播種するものはいづれも、來年の春に開花するもので、苗のまゝ越年しやうといふのである。先づ普通の方法としては播種箱、英語でシイズ、フラットといふものを拵へるが便法である、無論瓦鉢でもよいが瓦鉢は凡その大きさが極つて居るから、播種箱のやうに大きなものを得難いといふ缺點がある。播種箱も高襟式であつたら、其製作に少なからぬ費用を要するけれども我々は左様いふ必要はない、第一播種箱などは、植木壇へ飾るべき性質のものでもなく、且つ排水の良好なるを尊ぶから、手製の疎雑なるもの

がよい。然し手製といふのも鳥渡面倒であるから、到来合せの鶏卵の空箱を用ゐるがよい。夫も昔のは、眞實の桐て出来て居たから、鐵釘を打つた工合が悪いけれども、近頃は桐張りの杉折であるから、實にお誂へ向て、何の事はない、丸て播種箱用に出来て居るのである。

其處で此空箱の四隅を板附(釘)て緊め直して、夫から圖のやうに、底板へ排水穴を明ける、夫も焼火箸を突き徹して、穴を大きくすればよいのであるから、簡便の限りである。

穴は成るべく斜に明けるのが、排水に便利である、猶四隅に一つ宛稍大きいものを明けるのは、益々排水を便ならしむる道である、凡て種子に限らず、大抵の植物は排水の良好なるを好むもので、能く根ぐされなどいふのは凡て汚水の停滯から來るものである、一般に植物は水氣が無くて

は生活せぬ癖に、過ぎると枯れるといふ事を注意して居ねばならぬ。

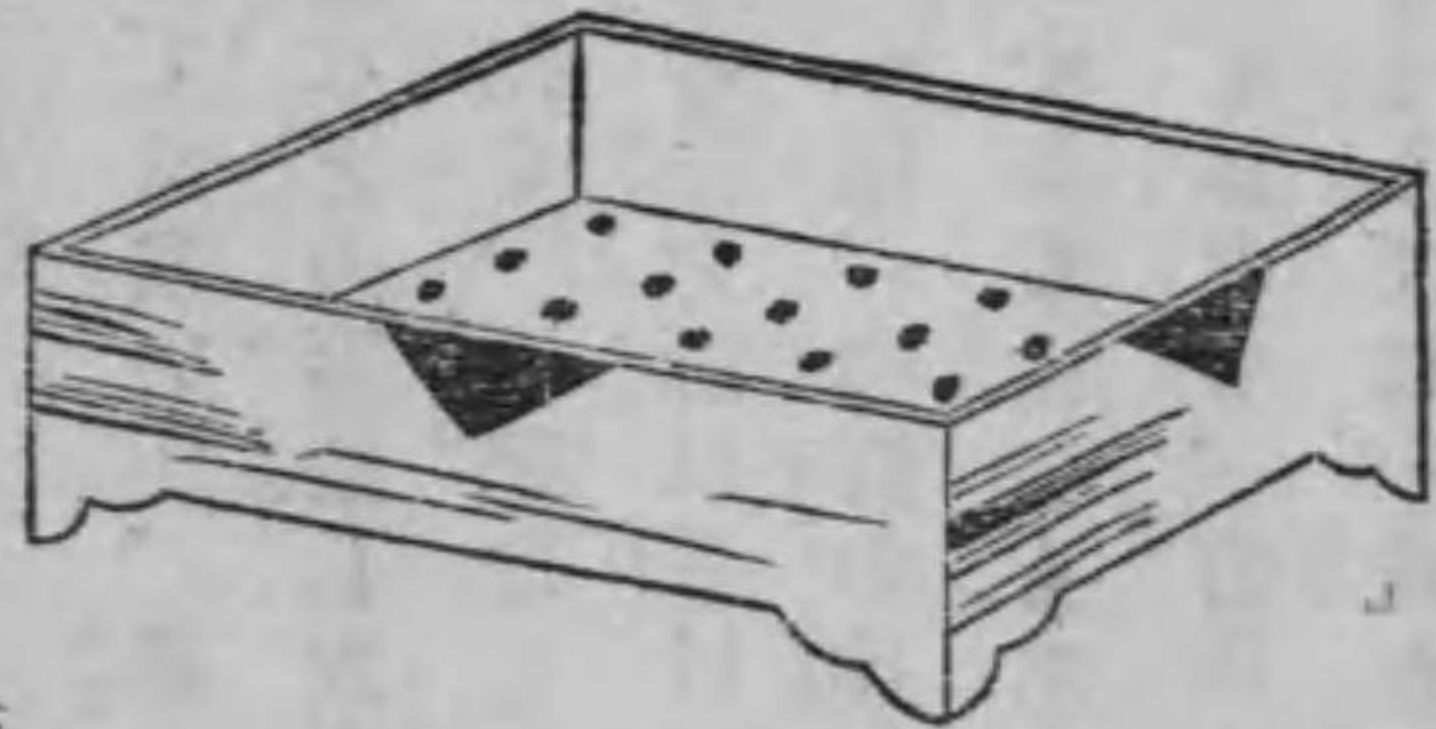
播種土

播種土と言つて別にある譯ではないが、詰り酸酵性の旺んな土を可いとしてあるから、木の葉や糞などの腐敗した土壤は能く此目的に達して居る、露地の直峙などであつたら、堆肥などを下へ布き込むけれども、播種箱詩であるならば、上記の土を篩ひ分けて、疎いのを下へ、細いのを上へ布けば宜しい且つ其土へは、少許の砂を交ぜるがよい。之れだけは或は酸酵性が足らぬといふやうな憂ひもあらうけれど我々のは温室物や珍卉の高山植物などの播種ではない、普通の草花に過ぬのであるから、誰もする家庭の植木いじりとしては、此位の設計で澤山である、全體種子といふものは、自然に地に醗れさへすれば、發芽するのが本來の原則

てある、餘り生兵法が過ぎると、角を矯めて牛を殺すの愚を演出する。

種子放下

土が出来たら、秋蒔種子を種物屋から買つて来て極めて浅く且つ薄く放下する深いと發芽が悪し、厚いと苗が弱い、若し餘り微細なものであつたら已むを得ぬから、砂に交ぜて一所に蒔くと、厚薄も、上からかけるといふは斷じて宜くない。



箱種播

なく平に行くのである。夫から種子が蒔けたら、箱を鹽か泉水へ浸して、底部から水を吸ひ上げさせるやうにする、之を反對に如露などで上からかけると、忽ち表土と共に種子を散す虞れがある。其後幾度灌水するにして

斯して後は、直接日光へ當ず、極く日に近い日蔭へ置くと程なく發芽する。

若し高襟式に行くと、箱の上を曇硝子で蔽ふたり、新聞紙をかけたたりするけれども、素人細工では、斯る事は甚だ危険であるから、先づ鶉の眞似はせぬがよい。

定植

嫩が割れて始めて小植物が出ると、西洋式なら直き植を替を行ふけれども、素人式としては、當分其儘に置き適宜二三寸の丈になつてから、鉢なり、露地なりへ植ゑ出す方が安全である。

一體秋蒔のものは、多くは丈夫なものであるけれども、未だ若芽の殊勝らしい時代に嚴寒に遭遇するから、初年には霜除をしてやるがよい、是

等も温室や木框の中へ入れ、ばよいが、これも馴れないと、反つて害を惹起すから、精切藁の霜除位にして置いた方が無事である。

秋蒔種子の中で罌粟は、古來移植が出来ないとしてあつた、併し之は近頃の西洋流に従へば、少しも困難な事はないけれども、素人業としては先づ、移殖しないで、始めから定植地へ蒔るか、或ひは鉢へ蒔いて、實生後弱い苗を間引て了ふがよい。

肥料

植木もよいけれど、肥料を行るのが面倒だとは、屢々聞く歎聲であるけれども、左様いふ御當人が能く三度の食事をすると思ふ、況して植物は芽が出てから咲くまでに、二度か三度行ればよいのである、何も面倒も手数もあつたものではない、左様思召す方は、天て植木いぢりや花いぢ

りをしてないが可、緑日の植木店を見て居れば夫で氣が済むではないか。併しながら我々として見ると緑日の植木を買つて来るのは、丸て他人の預り兒か貰ひ兒をしたやうなもので、美しいとは思ふけれど、何となく愛情が薄い、義理の柵ばかりで持つて居るといふ有様である、然るに自分て實生にしたものとなると、宛ら實子である、貰ひ兒より標致は悪くとも、眼の中へも入れたい程可愛い、従つて注意も行き届くと言つたやうな次第であるから、草いぢりをするならば、必ず自分で仕立てる事である。肥料が面倒なら縁日物の貰ひ兒をなさるがよい。

夫から肥料の種類にも種々あるが、人糞馬糞といふやうなものは取扱ひに困るから、先づ大豆滓油滓乾鱈のやうな清潔な肥料がよい、算盤珠から考へて、割に合ふかどうか知らぬけれども、花を觀賞するといふ

事が、業に算盤珠に合はぬ仕事である以上は、末の肥料などに就いて損益を考へるやうな卑吝な根性を出さぬがよい、高い廉いと言いた所で、僅か五十か百足ずの鉢ではないか、物の一圓と奮發する程ではない。又露地のものであつたら、肥料は淖土でも下肥でも隨意で、充分に與へるがよい。

秋蒔の草花

秋蒔のものでも必ずしも二年草と限るのではない、宿根即ち多年生のものでも、秋蒔くのもあるし、一年草でも手當の次第によつては、秋蒔にしてもよい。殊に野生草花であるなら、大抵のものは、秋蒔がよい、或ひは野生生物の中でも、物によると、其年に發芽しないのがあるかも知れぬけれど、翌春になると必ず生へるから心配する事はない。

花の樂

花が嗜きても、時間が無いから植ゑられぬといふ人は、未だ花の趣味を解さぬのである、解するも淺いのである。暇があれば勿論、暇がなければ、朝でも夕でも、寸暇をぬすんで、一度見廻りさへすれば、害虫の發生や、灌水の過不及や、冗枝の剪除などは直ぐ出来る、暇が無くても三度の飯を缺かしたといふ事は遂に聞かぬから、草の世話も出来ぬといふ事はあるまい、現に友人などで、非常に繁忙な職務に鞅掌して居る人も、温室や花園を持って、一切他人の手を勞せず仕立て、居る人がある。花といふものは、割合に手數のかゝるもので無いから、劇務鞅掌の間、巻烟草一本服む暇さへあれば、必ず世話が出来る。然も其間は一切の俗務を腦裡から去つて、宛がら無何有の郷に遊ぶのであるから、精神を慰安する事一通りであるまい。

千本松

婦人に作り得らる、松の盆栽

寒風凜烈骨を刺し腸に徹る時、満目の蒼緑、全く枯れ盡して、八百八鳥の何處に到るも、一點の紅をだに求むる事が出来ない。芬芳に迷ふて歡樂、長へならん事を祈つた痴蝶も、全く權花一朝の榮で、殘骸をだに見る能はぬので有る、天も凍り、地も凍り、乾坤盡く霜雪に封ぜらるゝ時、獨亭々として翠傘を展べ、龍鱗虬鬚を寒風に曝して撓まざるものは、千歳の齡を壽ぐ松あるのみで有る。

滔々たる時流は、華奢淫靡に流れて、堇の百合のと、實は花を愛るのではなく、花に諷へて、痴蝶の態を學ぶ時、壯烈丈夫の如き松を仰ぎ、修

聳たる螺柯を望む時は、言ふ可らざる敬虔の念を生じ、人をして大樹の蔭と頼ましめる概あるのも松である、古へより松を以て百卉の王となし萬木の長としたのも偶然ではない、夫て寒暑共に緑の色を渝へぬのは、貞婦の二夫に見えざる如く、忠臣の二君に仕へざると一般、益々松の面目を發揮するので有る。凡そ常緑木は、他の落葉樹の如く、秋風に泌みる悲しさに堪へず、ハラ／＼と軒場打つて落葉するものではないが、流石に凍て附く寒さに惱まされて、杉の葉は赤く銷び、栢の梢は黒く衰へるけれども、松のみは毅然として描くが如き翠色を漲らして居る、勇ましと言ひ、晴がましと言ひ、凡て丈夫的形容詞を以て賛歎すべき者は、實に松より外にない。

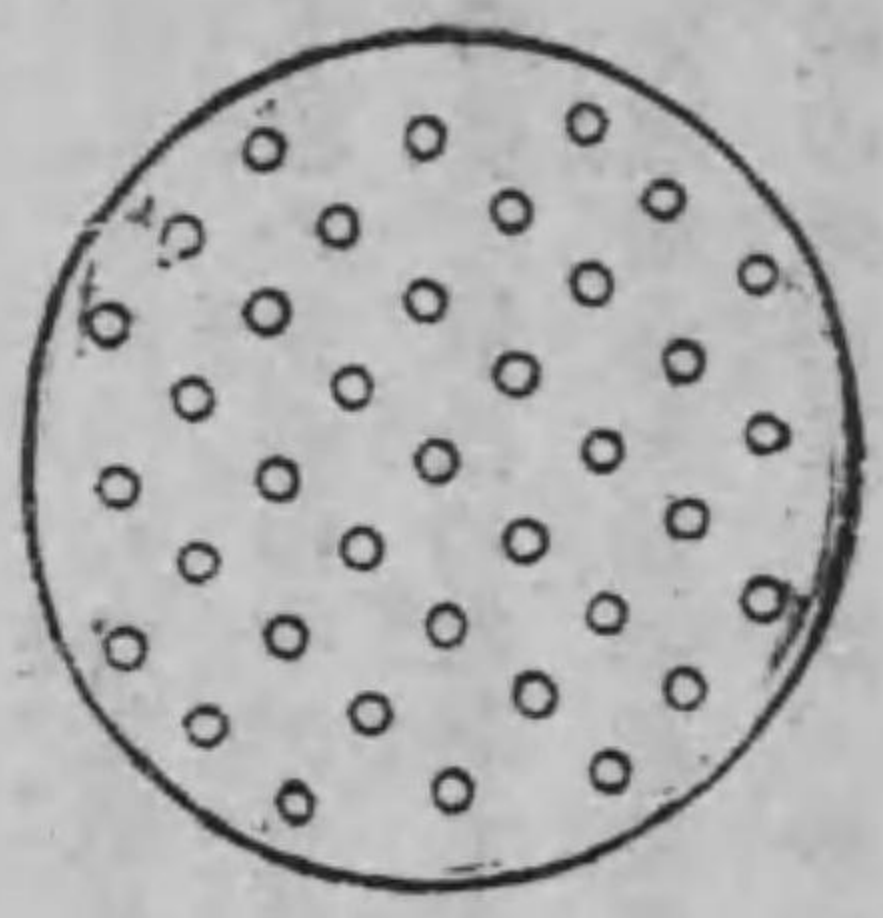
其處で此松を以て婦人方にも出来る盆栽法がある、夫は千本松である、

此盆栽は數十本の松を林立せしめて、宛も海濱の松原かの如く、又は鉢の中の土を少し推高くして、松山のやうな風致を取るのて有る。

千本松の作り方

其法は先づ松の實生を拵へねばならぬ、松の實は松毬の鱗片の間に挟まれて居るので有るが、其松毬が枯て、鱗片が反捲するやうになつては、子實は何時しか飛跳して了つて居るから、松毬が十分に熟して、今や鱗片を逆立やうといふ時に採收するので、先づ秋口であるけれども、夫を面倒に思ふならば、種苗商に就いて購買するがよい、但し此處に斷つて置くが、夫は赤松でなくてはならぬ、他の松では、造つて韻致を贏ち得るのが、中々困難である。

松の實を伏せるには、柔かに土を盛つた鉢に極めて浅く、排列よく置くべきで、其時期は秋でも春でもよい。斯して種子が発芽し、優しき若緑の色を見せながら二寸程に伸びたなら、夫を浅い鉢へ千鳥型に栽ゑるのである、則ち圖の如く、一方から見て、幹と幹とが重なり合はぬやうにする、詰り基盤の目を盛つたやうに規則正しく



なければよい理で有る。

斯して此鉢の儘で育てるので、假令木が成長しても、成る丈鉢をかへないで何處迄も其成長を抑制しながら造るので有るが、併し餘りに養分を失なはしても害が有るから、其處は過不足の無いやうに、時時薄き肥料を與へるので有る、先づ油滓の腐熟したものを、極く稀薄にして與へるので有る。或は定植すべき鉢へ直ちに播種し

て、其儘成長させる人も有るが、種子の強弱によつて、長短不揃になる憂ひが有るから、一度他へ播種したものから、木の揃つたものを移植するがよい。

盆栽としての偃松

然し松の盆栽の中、近時大いに着眼され、又人の嗜好を引くやうになつたのは、偃松の盆栽で有る、必竟は赤松にも黒松にも飽た人が贅澤から無い者好みを始めた結果からかも知らぬが、樹容の偃蹇、柯枝の槎牙、韻致の縹渺などが、他の松に見られぬ一種崇高な所があるからであらう。

偃松は千古不斷の雪を戴く高山の巔に生ずるので、海拔七八千尺の高所に行かなければ決して見る事が出来ぬ、元來松は喬木で有るから、普通

の原則としては、山麓の喬木帯に生へなければならぬのに、夫が喬木帯どころか、灌木帯を通り越して、其先の草本帯に介在するので有る。富士山は本土第一の高山で有るが、偃松は甚だ少い、然し甲州の盆地を隔て、富士と相對する八ヶ嶽には甚だ多い、一望際涯なき迄に地に伏して、蜿蜒として筵を敷くが如き有様で有るが、然し盆栽にして、高山の趣致を掬し得るやうなのが無い、否澤山あるけれども、掘り取る事が出来ぬので有る。假令出来たにした處で、下界へ持て來ても活着せぬの有るから、終に立派な盆栽を見る事が出来ぬ。僕の知る處では、偃松の盆栽を持つと言はれる程のは、四五人より外ないであらうと思ふ。此松は他の松に於けるが如く、決して亭々として空を凌ぐやうな趣がない、如何なる大木でも、凡て地に伏して、恰も太蛇の横はるが如くに這

つて居る、是が此松の特性であるから、其性を利用して、懸崖の趣きを造るに便て有る。時に豪駝などで、態々偃松の幹に銅線を使用して、垂直に立たせたものを見る事があるが、是等は木の特性を強て失はしめたもので、一顧の價値でもない。

松毬を用ゐたる慰み

猶又松毬を以て、面白い細工をするのがある、元より子供騙しのお慰みに過ぎぬが、何人にも直ぐに出来るので有る、夫は松毬の枯れたのを取つて、其鱗片の間々に稗を蒔くので、开して濡りを與へて置くと、旬日ならざるに稗が青々と芽を出して来るから、夫を絲などで軒端に吊して置くと、夏の夕べに一種清新の趣きを添える。然し之よりも一層進んだのは、松の實生を直に松毬の間に栽ゑると、宛

ら松毬から自然と實生が出たやうに見えるので凡て是等の慰みに使用する松毬は海松や五釵松のやうに、毬の大きいのがよい、普通の赤松黒松では小ささに過ぎて見榮えがない。

模様としての松

夫から衣服の模様に松を用ゐる事は、昔から常に行はれる處で、且新年は瑞木といふ因もあり、春着などには極めて多いのであるが、其模様の松なるものは、皆實生や若木を用ゐるので、盆栽に尊ぶ處や、繪畫などに選ぶ物と、全く違つて居るのは奇なる現象である。これは何の理由に基くかは知らぬが、必竟優しき衣服の模様として、老松は嚴しきに過ぎるから、自然と若木を選択したのであらう、然も其若木も赤松でなく黒松を模すのが多い、惟ふに模様としては、黒松の樹容が、赤松よりも整齊

であるから、模様化しよいのであるかも知れぬ。門松などに用ゐるのは、皆黒松であるから、御手近で實物を見ても、直に了解されるのであらう。

素人鉢植

此處に鉢植といふは、韻雅なる老樹の盆栽ではない、只鉢に植えるといふに過ぎぬ、木なり、草なり、何でも鉢へ取つた物を意味するので有る。开して極く僅な空間にいじる、詰り椽先の冗戯を研究する積りて有る。

春の花

花の色を精査すると、概して春は濃厚で、秋は淡泊なのが、多い、學問上は兎に角予等から見ると、自然の要求として、春は濃厚なるべく、秋は水の如く淡々として居なくば、畫にも詩にもならない、若し春の花の色が濃くなければ、昆蟲の眼に止まらぬといふならば、色でなく香の方で蟲を招けばよさうなもので有るのに、色によつて蟲の注意を牽くやう

に出来て居るのは、單に媒花蟲の關係のみならず、天地自然の風物と調和する爲に、紅紫絢爛の美を興へた者であらう。

其處て花色の是非は兎も角、春の花は概して其草の丈が短かい、福壽草一輪草、雪割草(スバマサウ)白頭翁或ひは「あねもね、ころねりあ」風信子のやうな者迄、或ひは花斗り先へ出たり、又は葉が僅かに地に靡いて居るのは、夏草の蓬々と野を蔽ふの比でない、之も何等かの理屈が有りさうに思はれるが、夫は詰る所、早春は他の大きな草木が葉を襲ねずに、猶嚴寒蟄伏の状を存して居るから、強て丈伸びをせずとも、充分に光線に浴する事が出来る爲て有る事は前に述べた。

予等は右の理屈は無しに、其纖憐の優しき嬌姿あるが爲に、殊に春の花を愛するので、第一に小さいものは場積を取らない、従つて借家の庭で

此リホン鉢を鉢の左方に挿す



麥葉細工の鉢

栽培と 四季の園藝

も三疊の椽先でも挟い所で多くの鉢を弄そふ事が出来る。之が予等に取つては、お誂へ條件に該當するので有る。

鉢植に必需なる物件

盆栽に必要な物件は何かといふと、土壤で有る。土壤かと言へば夫迄であるが、大道の土を持つて

來て植ゑれば夫てよいと言ふ理のものではないから、多少土の選擇をせねばならぬ、此頃の園藝書なる者を見ると、嚴ましく土壤の講釋が言つてある、何の木は何、某の草は何と、丸て醫師の處方のやうな事が書いてあるのて、折角盆栽をいぢらうといふ氣の有る者が、二の足を踏むやうになつて了ふ。のみならず、其園藝書を編述した人が、實際に方つて果して一々分拆を経てから土壤を遣ふかといふに、或試験の目的以外、先皆無であらう、然るに其分拆から出た數字其儘を列擧して、砂質壤土の性質は如何、粘質壤土の結果は如何と言つた處で、素人には何等の益もないから、去る理論には拘泥せず、頃合の土壤を持つて來るがよい。董一杯植ゑるに、分拆試験も、土壤の性質も入つたものではない。

頃合の土とは如何

頃合といふ字は便利な代りに、不得要領の氣味もあるが、此處で頃合といふのは、鉢へ容れて、幾回水を與へるも地表が板のやうに空虚なしにならない土壤で、つまりサラ／＼して水脱けのよい者である。斯ういふ土壤ならば大抵の植物に適當するので、素人遣ひとしては、一番浮雲げがない。

此様な土壤は、多く葉の腐つたものを抱擁して居るから割合に肥料氣を持つて居る、其處等の小山の崖や、森笹藪の表土は、大抵此種類で、鰹て掘らずとも、手で掻集められるやうな土壤で有る。

鉢植の注意

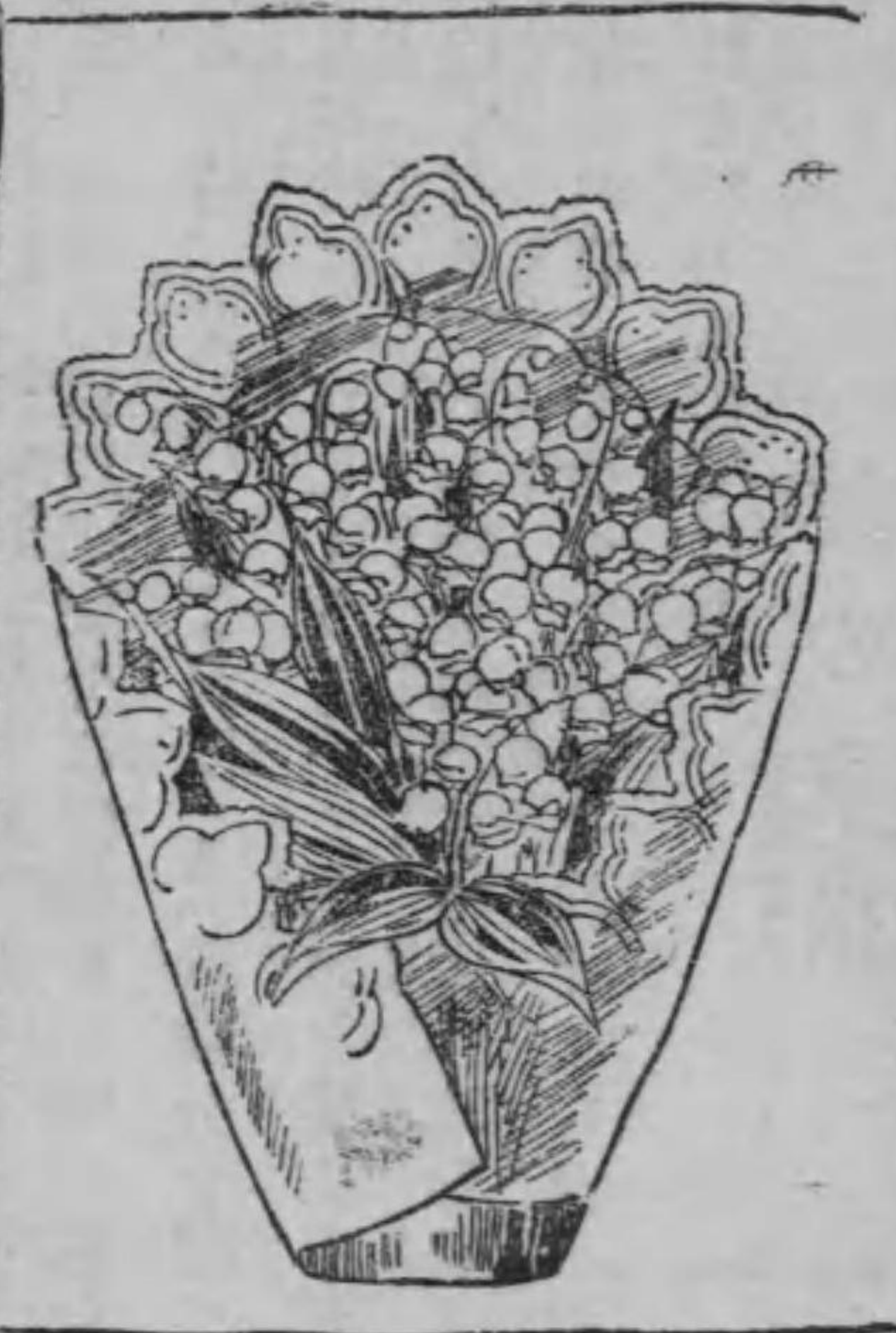
假令御誂への土壤が出來たにした所で、其植方に所謂コツなるものが有る。無暗と鉢の中の土を固く押詰ると、折角のサラ／＼した土も、其特

長を失つて了つて、地表が凝固になるから、空氣も浸透せなければ、水も通らない、能く言ふ根の固くなるといふ失態を來して了ふから、植物を植ゑるには僅かに其位置を保つといふ程の程度に押さへて置いて、甚だしく壓迫しない事である、夫て鉢へ土壤を盛るにも、先づ七分目位にする、若し鉢一杯の土壤であると、灌水の際に水が皆外へ溢れて、實際鉢の中へ落着のは其割にも當らない。

春の花の根

草木を植ゑる時に、鉢が小さく、根が大きいといふので根をバチ／＼切つて了ふ人が有る、之は夏秋の植物ならば、甚だしく害は無いやうて有るが、春の花の根を断つといふのは禁物て有る。能く臘月に福壽草を買つて來てどうやら花丈は咲いたけれども、葉も出

ない中に枯れて了つたと言つて不足を言ふ人が有るが、之は福壽草の罪ではなく、夫れを賣る花戸やが悪いので有る。福壽草の根といふ者は、頗ぶる長い。福壽草に限らず、春の花の根は其草莖に比較して、長丈でも三倍以上で其擴りは五六倍以上も有る。つまり地上へ出て居る所が少なく



て、地下の部が多い、丸て鹿島の要石宜しくに出來て居るので有るから、

四季の園藝

其根を無暗に剪み切つて了へば生活を保たないのは知れて居る、然らば能く枯れずに花が咲くのは如何なる理合かといふと、春の花は其膨大な根で、去年の夏以來充分に營養分を吸ひ込んで、花になる部分を拵へて有るから、假令根を切られても、營養分を持つて居る花丈は咲くので、其代り花後に成育しようといふ葉莖を養ふ事が出来ぬから、遂に枯れて了ふので有る、若し向後福壽草や雪割草を買ふといふ時が有つたら、根の切斷され有るや否やを注意せねばならぬ、胴切にされて久しく生きて居られる筈のものではない。

鉢の取扱

植木鉢で便利なるは未釉の瓦鉢に限るは言ふ迄もない、餘分の水は鉢へ吸収するし、土中の水が不足すれば、外側の鉢から補給して呉る、此位

便利なものはないが、汚れ易いのと、蘚苔の附くのが傷て有る、汚れる紙にて鉢を包む



好む所に従つて、多少體裁のよい鉢を用ゐるがよいか、何も價を多く出

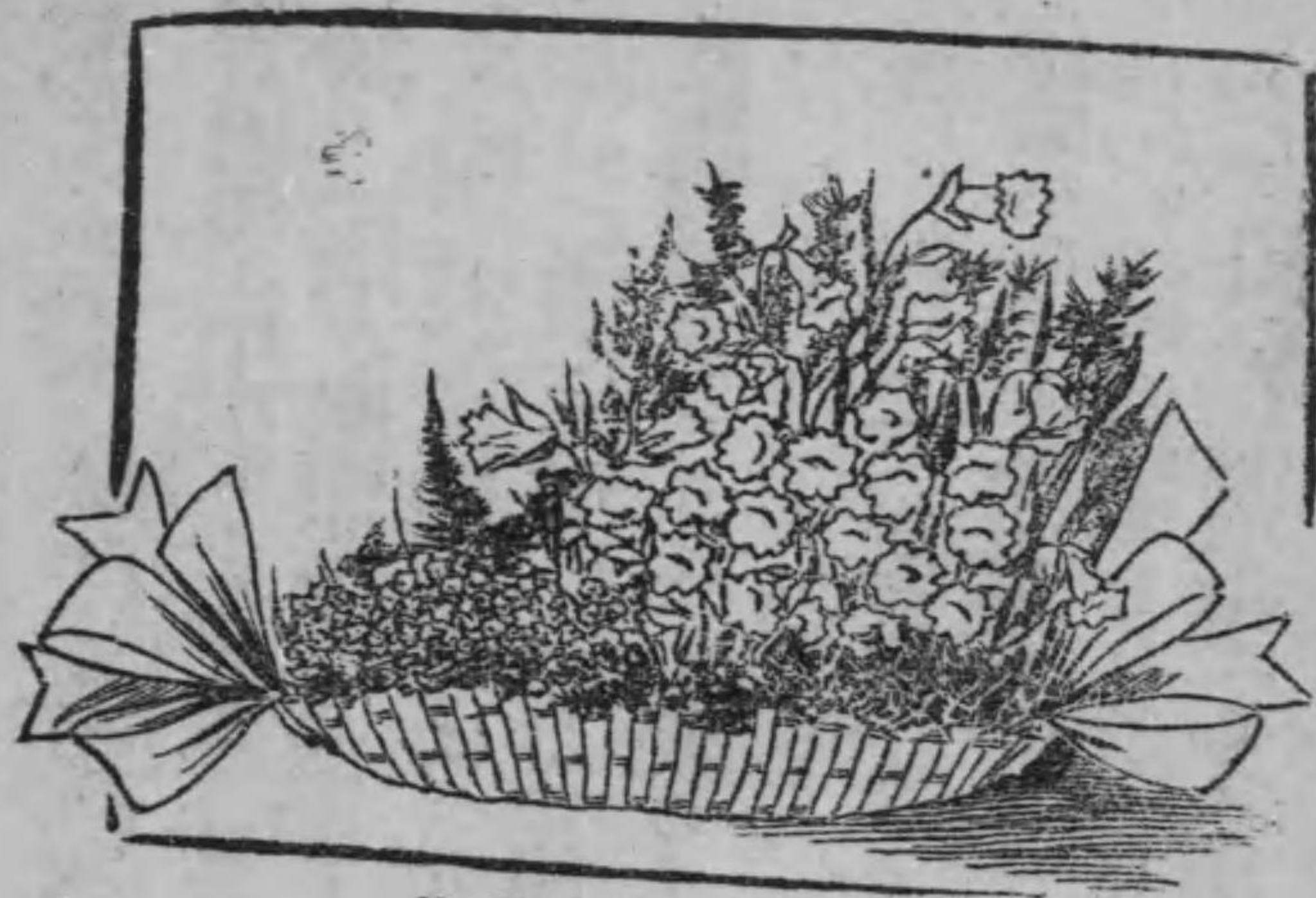
したからとて、夫て能事足れりと言ふ者ではない、鉢の色と植物の花葉の色と、能く調和する事を目的とせねばならぬ、青磁の鉢へ羊齒類を植ゑても、蒼翠滴るが如き其葉が、少しも見榮がしない。綠葉を専らに見る者は、白い鉢に限るが、濃紅の花の咲く者は、青色の鉢に適するのて有る、然して其方圓深淺も、凡て中の植物と適合する事を考へねばならぬ、價が貴くとも、色の調和せぬ鉢は、三文の價値もない。

夫から未釉の瓦鉢と、立派な釉薬の懸つた鉢とを問はず、鉢の周圍と底部とは極めて清潔にせねばならぬ、不潔な土壤に生へる植物でも、不潔な鉢は好まぬ、殊に底部の不潔は往々にして蛞蝓を生じるので、恐しき其一枚齒の爲に、大切の芽を綺麗に食べられて了ふ事が有る。鉢を雨洒にして置いて、泥土の跳が附著するなどは、最も忌むべきの一て有る。

種子は浅く播け

追々播種の好時季となるが、種子は軽い土壤に浅く播き付けさへすればよい、西洋の播種規則に、『種子の三倍の深さに播種せよ』といふ事がある、即一分大の種子ならば三分の深さに播くべきであるが、之も版て捺たやうな理には行かぬから、何でも浅く播きさへすればよい、若し種子が露出して居たらば、藁灰のやうなものを、フワリと振り撒いて置けば夫てよい。

種子の萌芽に必要なものは、水分で有るが、播種した上から水を遣ると微細な種子は水の爲に流れて了ふから、播種鉢は必ず鉢を水へ浸して下から次第に浸徹するやうにせねばならぬ、白雨のやうに上から水を遣つては恐らく骨打損になつて了ふ。



籠に植たる花物

瓦鉢を飾る方法

四八八

瓦鉢は醜いからと言つて、諸外の鉢に植る替へられない場合には、其鉢を圖の如くに、美しい紙で包むがよい、これは西洋の窮策を踏襲するのては有が、日本式家屋にも満更不釣合てもない、特に奉書を用ゐる時は反つて上品になる、或ひは經木眞田を手際に鉢の上に巻く時には、更に見栄えがする、其代り紙包や眞田巻は只綺麗なハイカラ式にする斗りて

雅致とか韻致とかいふ點は失せて了ふ

籠植の花

籠を鉢の代りに用ゐるのも面白い仕方で、入谷の牽牛花にも其式が有るが、夫は瓦鉢を籠へ入れたに過ぎぬ、此處にいふのは籠へ直に植込むので、手際な點を見せるのは、龜甲目の籠がよい、土の醜れるのを防ぐ爲には、馬蘭の葉を切つて、底へも周圍へも列べ布くので、中に土が有つて水氣を持つて居るから、其葉が久しく青々として居る、籠の中の植物は成るべく球根類が植ゑよいので、詰り根の張りが少ないのと、花が丈夫であるからである、鬱金香や風信子のやうな者がよい、水氣が乏しくとも、忽ち衰容を示すやうな事が無いのみならず、花が剪綵のやうに綺麗である。然し之は青竹の籠に限るので、竹が黄色になつては、甚だ外觀が悪

い。然る時には裏白の莖で編んだ籠を用ゐるか、又は枯竹を他の色に塗るもよし、或ひは鉢の如く紙で包むもよい、元より俗で有るけれども、此場合に植ゑられてあるものは、韻雅な老樹ならざるは勿論で有るから、紙包の御化粧は反つて美しさを添える。

鉢植と日光

夏の強烈なる日射は兎に角、温和な春の日は、如何程草木を照しても、決して害がない、本来羊齒類の葉は、強い陽光に逢ふと、其青い葉面が鈍紅色になり、褪赭色になり、所謂葉に焼を來すので、少なからず美觀を存するけれども、春の日は弱いから、如何なる優しき葉をも損はない箱根草のやうな愛らしい繊弱な葉でも、其珠玉のやうな嫩葉が、陽光の爲に反つて早く展開して來る、若し之が夏の日であつたら、半日ならず

して萎れて了ふので有る。

要するに春の植物は、多くの場合日射の下に放置するがよい、然し春は割合に晝夜の温度が激變するから、夜は少なくとも軒下に入れるがよい、但し四月十五日頃になれば其用意も入るまい。

室内の植物

盆栽を机上に飾るとしても、一日坐間に置くといふ事は人間の健康上は兎に角、草木其物の爲に宜しくない、室内の塵埃、則ち帚や紙塵の塵は四方八方から草木の葉に堆積して、葉の氣孔の組織に害を與へるから、先づ一枚が葉先から黄凋して來て、次第に全體に及ぼす、其外室内は屋外に比して、空氣が乾燥に過ぎるから、由來空氣の濕潤ならん事を好む草木には利益が少くない、『夜露に當てねば不可ません』といふのは、此理屈

て有る。

其外にも室内にのみ置くと、植物の容姿が壊れる、夫は一方光線の這入る方に斗り向つて伸びる性質が有るから垂直に立つて居た草莖も前へのめり、花も一方に斗り向つて位置を變更して来る、其外枝條が冗長になつたり、又促成物のやうに組織が柔軟になる虞がある、面倒でも時々出入させねばならぬ、其代り以上の手数さへ厭はなんたら、孟春駘蕩の候常に紅黄紫白を坐間に眺める事が出来る。

「花をし見れば物思ひなし」といふ事は、敢て人間の花を譬へる迄もなく、實際の花に對する時に起る感想で有る。

盛花の話

盛花と挿花

西洋の盛花といふものは、何時の頃始つたものか、殆んど漠として尋ねる事は出来ぬが、一種の盛花と言つたやうなものは、羅馬全盛時代に業に行はれてあつたのであるから、其起原は頗る古い。夫が漸次流行し來つて、今日のやうに花がなければ儀式が擧げられぬといふ程になつたのである。

今西洋の盛花と、日本の挿花と、其孰れが進歩したものであるかと言ふと予等盛花黨の人間でも、終に日本の挿花の前に胃を脱がねばならぬ。盛花は綺麗である、派手である、而して妖冶である。日本挿花は、其古

流たると、池の坊たると、遠州たるとを問はず、決して盛花のやうな友仙模様の外観はない、只其挿し方によつて、能く自然の状態を摸し來るので、何の事はない、根の無い盆栽を拵らへるやうなもので有るか、綺麗といふ綺麗の花を蒐聚した盛花のやうな艶麗はない代りに、自然の韻致を彷彿の間に認め得るので、一朵の花を活けても、直ちに渺茫たる郊外の景致を描き出すのであるから、高尙の點に至つては、到底西洋の盛花の企て及ぶ所ではないが、惜むらくは今日の流派を立つるものは、挿花の精神を滅却して、只形の上をのみ模するが爲に、到底死んだ花を活けるやうな事になつて了つた。従つて時流の好尙には合はず、空しく一隅に孤立して援無きに至つたのである。若し眞に挿花の精神を解して、活きたる花を挿し得る宗匠が出て、天下を詢へたなら、狂瀾を既

倒に廻らす事も難からずであらう。

盛花の方則

盛花には日本のに置けるが如き、規則立ちたる一定の方則はないが、然しながら一種の不文律として、據る所のものはないでもない。先づ中央に一本高い眞を立てる、开して凡ての花が、之を基として翕合せらるゝなどは日本式の眞を始めに立てると一般、只眞といふ術語が無い斗りである、开してアジアンタム屬の葉や、蚊蠅釣の葉や、ベゴニアの葉などと、外の花とを用ゐて、色の配合を附けるのがお定まりで、凡そ盛花に用ゐる花や葉は、時候々で大抵一致して居て、或範圍を脱出しない、則ち變通の途に處する能はざるに至つたのは、日本の挿花が規則にのみ拘泥するのと相似て、矢張死んだ花を盛る嫌ひがないでもない。

抑も盛花にせよ、挿花にせよ、其精神をさへ得て居れば、如何なる花か活けられざる、如何なる草か用ゐられざる、草木花卉てさへあれば、何ても盛花挿花にならぬといふ事はない、只花の容色によつて、夫に適すべく盛りつ挿しつすればよいのであるが、徒づらに規則や慣習を墨守するが爲に、何處も同じ鑄型になつて了ふといふのは、實に残念である。

盛花の精神

然らば盛花の精神は何かといふと、日本のやうに、自然の韻致を坐間に泛べようと言ふのではない、何でも美しい花を澤山一つ所に盛つて、恰も水彩繪具を寄せたやうに、配合能く綺麗な手際を見せると言ふのが主で、花で薬玉を拵へるやうな積りである、日本のは坐敷を落ち附かせる

爲であるが、西洋のは派手に陽氣に浮かせるのである。此處に至つて花の大小形態と、色彩の配合が嚴ましくなるのであるが、本来の精神が夫れであるとするれば強ち蘭の花で無くばならぬ、麝香連理草でなくばならぬといふ理屈はない、野の花でも、山の花でも差支はないのであるが、豪華を衒ふ結果、一輪五磅も、十磅もする蘭の花を遣はねば巾が利かぬやうになつたのは、實に盛花の精神を滅却して了つたもので、寧ろ花を賊するの徒である。

其處で予が諸君の家庭に奨める盛花といふものは、決して左様いふ贅澤な花を言ふのではない、目を喜ばせ、心を悦ばせ、併せて室内に一種の粧飾を添えさへすればよいのであるから、今日或高襟連中の言ふが如く盛花には西洋草花でなくばならぬなどいふ事はない、庭のでも野のでも

以て盛るに足りさへすれば、菊でも金鳳華でも宜しいのである。

盛花に要する器具

盛花に要する器具と言つた所で、大したものでもない、花鋏、小刀、竹申、水苔、銅線、籠若くは皿の類があつたれば夫てよい。

花鋏は日本在來の花戸用で少しも差支はない、剪定鋏などは、値が高い斗りて、反つて馴れぬ中は遣ひ憎い、而して鋏の用途は、花梗や花莖を切るが爲めに用ゐるのである。

小刀は竹申を削り、又は花の木本なる時、鋏で工合の悪い折に使用する。

竹申は花を結び附ける足にするので、其下部は臺座へ挿入する爲めに尖らせる。



水苔は花の切口へ竹申と共に縛り附けるもので、此水苔が無いと、花は水分の蒸發の爲に直ちに枯れて了ふから、濕氣を含ませる爲に使用する。若しどうかいふ場合に花が上へ脱け出て居ると、直ぐ眼に附くといふ虞がある。

水苔は勿論天日に曝して、茶褐色に乾されたのを用ゐるので、之は花戸に行くを取次いで賣つて居る、若し生きて居る青々としたのが得られれば更によいけれども、曾て水苔の生品を使用した爲、高貴の御前で蚯蚓が匍ひ出したといふ失體漸がある、水苔の生品には、兎角蟲が棲息するから必ず乾燥したものをを用ゐるがよい。銅線は銅には限らぬ、眞鍮でもよいが、造花用にする毛の如くに細い。

に限る、これは少し鈍すと遣ひよいが、細いものであるから、夫迄には及ばない。

籠や皿は即ち盛花を飾る土臺で、これが無くば、花ありと雖も如何ともすることが出来ない、然し日本の如く、水を入れるのでないから、籠や皿には限らぬ、中なる盛花に相應さへすれば何んでもよいので有るが、贈花には籠が一番體裁がよいので、凡て籠類を使用する事にして居る。籠の材料は竹、籐、木通、經木、裏白羊齒と種々あるが、重に竹と經木が用ゐられて居るのは、輕便である、値が安いのとによるであらう。其外花を飾るのは、額縁、窓、洋燈臺、靴、洋杖等、如何なる器具へても取り附けられるが、今日西洋で行はれて居るのは、凡て本物でなく靴でも帽子でも皆經木のやうなもので模型を拵へて居るが、日本室へ飾る

に靴の容器などは甚だ感服せぬから、外に適當なものを見出すがよい。

花を貯へるには如何にすべきか

一つの盛花を拵へるに、花が一時に集ればよいが、或ひは集り兼ねる場合もある、夫も一日の中なら兎も角、二日に渡るやうな場合には、折角前に集めた花を散らしたり、萎れさしたりする憂ひがある、斯ういふ時には、手附ず甕や手桶へ投入するのは、誰でも思ひ附く事であるが、或ひは風が當つた爲に、水は揚げて花が散つたり、又は開き過ぎたりする事がある、夫でなくとも花を損め易いから、斯る時の用意に一つの花箱を拵へて置くがよい。

花箱は普通の家で使用するに、大きな物は邪魔であるから、長サ二尺乃至二尺五寸、幅一尺四五寸、深さ四寸もあればよい、石油箱も少とひと

いが、麥酒の空箱を削つて自分で作れば造作もない。底の四隅へ排水穴を明けて蓋がシツクリ合ふやうにさへなつて居れば宜しい、夫へ枕を入れて餘り重なり合はぬやうに並べ、霧水を吹いて蓋をして置けば、如何な花でも能く久しきを保つから花の揃ふ迄緩々準備が出来る。

竹串は如何に削るか

竹串は前にも言ふ如く、一方は花を取附ける爲、一方は臺座へ挿す爲であるから、素性のよい竹でさへあれば、眞竹と淡竹とを選ばぬ、只成る可く生のものを用ゐるがよい、左様でない時、割る時に折れる事がある器の大きさによつては、團子串でもよいが、彼は四角になつて居る、是は扁平割たい、何故かといふと、花を取り附けるに、扁平方が合せ目の据りがよいのである。

先づどうやら竹の足が削れたなら次に草色の染料で、緑に染めて了ふが



宜しい、之は是非といふ次第でも無いが萬一竹が見え透く折に、緑色である目立たぬからである。

花の取附けやり

青竹の足に花を取り附けるには、大な花なら無論一輪、小さいのなら二三輪づゝ、其花梗を竹申の扁平な方へ添えて、夫に一抓の水苔を附け、其水苔と共に、銅線で縛り附けるのであるが、今一層丁寧にするると、圖の如く、最初竹申に銅線を取り附けて置き、夫に花を添えてからげ、然る後別に水苔を縛り附けると、花が動くといふ虞れがない。

若し又牡丹のやうな大な重い花ならば、其割に竹申を太くし、又アマリスのやうな莖の太い花であつたら、竹申を其莖に貫すなど、花と器とによつて種々工夫を凝すので、詰り機轉といふものが肝心である。

臺座の拵へ方

花を盛るにも、花壇、瓶、皿、籠と、種々違ふけれども、先づ籠に就い

て一例を言へば、經木眞田製のやうに、中の見えぬものなら兎も角、目の疎い竹籠になると、中の臺座が露出に見えては、如何にも見苦しいから、夫を盲く隠して了はねばならぬ。

先づ細い丸竹で籠の中に収まるべき輪を拵らへ、其輪を芯にして、之へ菜か蘿蔔の葉のやうなものを束ねつけ、堅く針線で縛ると、恰も炭俵の底に這入て居る枝束のやうなものが出来る、之が則ち臺座であるけれども、立派な御坐敷で、菜葉の臺の見えるのは、手品の種が知れるやうなものであるから、之へ針葉樹の枝先を縛り附け、夫でもお里が知れさうなら、隙間々に芽先を挿し込むので、之に用ゐる針葉樹は、氷室杉か、這柏楨、俗に磯馴と呼ぶ者が宜しい、這柏楨は昔から日本の活花に使用し來つたもので、今日何所の花商にても賣つて居るから都合がよい。

斯くして外枠の臺坐が出来たら、其内側の臺坐を拵へる、是には無論這柏檣の飾りは不用である。开して中心は菜の固く丸めたのでも何でもよい、要するに是等の臺坐を動かぬやうにして置くか必要である。

花は如何にして盛るか

花の盛方には種々ある、先づ眞を先へ立てる、中から外へと移るのと、外から始めて段々中へ挿して行き、眞を一番後に立てるのと、又眞と外と中といふやうに、飛びくくにするのと、いづれでも御勝手次第、別段に規則も何もないが、眞を始めに立て、凡て之を本位として盛るのが一番容易である。

而して眞は中央へ立るのが一般の例であるけれども、中には捻つて、右とか左とかへ寄せる人も有る、これ等は旨く行ぬと、餘程醜い者になる。日本のは花は床とか、違棚とかへ飾る爲、正面さへ見えればよいから、眞面に見て、姿勢が整つて居ればよいが、西洋式のは卓子の中央に置くのて有るから、四方から見て、孰れも正面にならねばいけぬので、其挿方が面倒である。

眞には如何なる花を用ふるか

日本の挿花でも、眞としては咲切つたものを用ゐない、成るべく蕾の堅いのを用ゐるが、西洋でも、眞へは餘り大輪の花を遣はない、夫は眞の爲に、他の花を蹂躪される氣味が有るからで、先づ眞としては、丈高くして強く、花の細かさものか、又は葉物を用ゐる、葉物といふと即ち葉蘭や大蚊蠅釣のやうなものである。左様すると、眞が高く立つて居ても、少しも目觸りにならぬ、若し之に反して、牡丹芍薬花菖蒲といふやうな

ものを使用したら、其周辺の花にはどういふものを用ゐるか、殆んど如何なる花を持つて來ても釣合ひが取れぬやうになつて了ふ。

平盛か圓錐形か

同じく花を盛るにも、眞を高くして、他は順次に低く、所謂圓錐形にする法もあれば、扁く平に盛るものもある。

前者が多く用ゐられるといふのは、此盛形に行くと、色々な花を大小構はず使用しても可笑しくないからで、平盛にすると、凡て大輪で立派なもので無いと引立たぬから、どうしても圓錐形になつて了ふ。

花斗りを使用するか

盛花を拵へるに、花斗りて出来るかといふと左様はならぬ、西洋式の盛花には、葉が無いと眺囁に供する事が出来ぬ、其處で日本て言へば、

石長生鳳尾草のやうな、アジアンタム屬の葉や、石刀柏やカラジウムといふ芋の類や、ベコニアといふ秋海棠屬の葉を専ら使用するのである。而して此使用する葉物類は僅かに十種内外に限られて居るやうであるけれど、盛花に葉を交えるといふ本来の主旨なるものは、花の紅白紫黄の嬋娟塗るが如しと言ふに對して、色彩の配合上から蒼綠色を挿入するのであるから、必ずしも以上の數種には限らない。日本の野草で言へば、子持羊齒、犬薇、高野蕨、立忍等の羊齒類、夫から唐松草、石松、水杉のやうな者は、遙かにアジアンタムを凌ぐであらうと思はれる。如何なる盛花の名人があつても、全く葉を用ゐる事無して、花を納める事が出来ない。造花が綺麗であるに拘らず、其花籠は何處迄も造花の花籠で、少しも生命の有る事が著れぬのは、花の研究斗して、葉の方に重

きを置かないからである、畫家が一幅の畫を作るに、畫の外の餘白を適宜に残すといふ事が、位置を取る上の必須條件たると同じく、花と共に葉にも重きを置かねばならぬ。則ち花斗りでは盛花は出来ぬので有る。

盛別の仕方

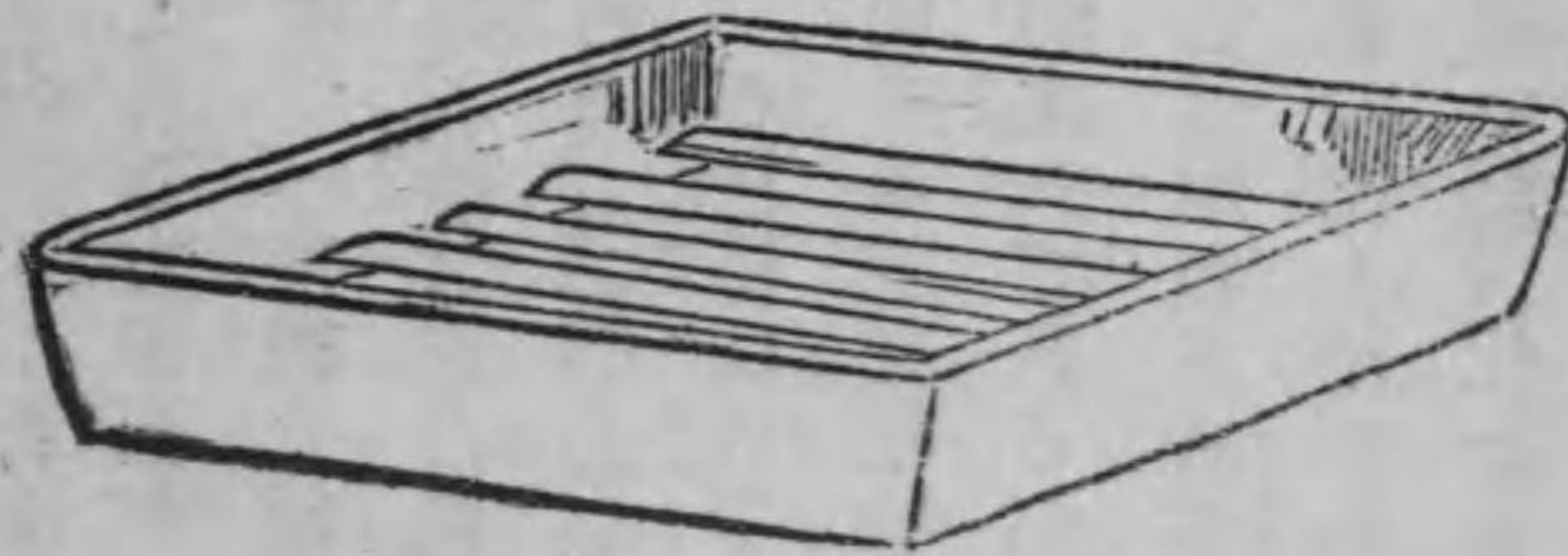
盛別の仕方としては、前にも言ふ通り、第一に眞を立て、次いで各方面の主となるべき花を立て、夫から隙間へ小さい花や葉を挿すので、盛り方の上手といふのは、必竟花を多く使用しないで、賑やかに見せるといふのである、花商の桶のやうに一杯に挿して了つたのでは、技術も何も有つたものではない。

籠の蔓は如何すべきか

籠の蔓は露出のまゝにして置くと、餘り見よくないので、之を植物で隠

す事にして居る、予等から見ると、時に蛇足と思はれるのも無いではない、花によつては、蔓の見えて居る方が面白いといふやうなものも有るが、通例は必ず蔓性の植物で巻く、一番能く使用されるのが常春藤の斑葉などであるが、之は非常に大なる花籠ならば格別、小さな籠では、葉が勝過ぎて反つて外觀を害す事が有る、其處で何が一番能く釣合ふかといふと、石松蔓の右に出る者はない、石松蔓は天の岩戸の畫に、銅女命が頸にかけ居る植物で、石松科に屬する隠花植物であるが、枯れても色が變らない、夫に葉が細かく、莖が丈夫であるから、細工が樂である、臘月になると京阪で正月の柱掛として用ゐて居る、近頃東京でも大分用ゐるやうになつたが、何となく古風の飾り附である。此草を以て蔓を巻くといふ事は、未だ一般に行はれないが、仕上りは非常に上品に見える、夫から

餘事ではあるが、若し其花籠を人に贈る場合には必らずリボンを結び附けて遣る、之は日本の熨斗と同一意味であるが、予輩が贈答するなら、熨斗でも一向にかまはぬ。其場合には、籠の蔓の右の方へ熨斗を添えて、熨斗の上から水引で手際に括るので、或ひは祝儀物屋



活花の皿眞寫

にある金銀の飾水引を使用するもよからう。
机上の盛花
自己の机上に小さな盛花を拵へるには、小さな水盤か、寫眞の二枚掛バツトのやうなものを置いて夫に黍殻を圖の如く横に拵め込み、其上を這柏槇の葉で見えぬやうに隠して、其黍殻へ花の足

を立てるのであるが、今一層簡便にするには、少量の水を入れたる後、這柏槇を幾らも挿して、全く黍殻を用ゐない、开して花へは足を取附けず、切り放して、適宜に挿すと、這柏槇の枝に支へられて、どうやら思ひ通りの位置を保つて居る。是等は餘り無雜作過ぎるけれども、簡便此上なして、竹串も水苔も針線も不用である。

花簪は如何にして水を保たせるか

生花の簪は、どうして水を保たせられるか、如何にせば萎れずに一日を持続するかといふ疑問が往々あるが、これも前の盛花の仕方と大同小異で、次のやうな方法で有る。

先づ石刀柏の葉と香葵の葉とを摘み、次いで季節に應じて、董でも、麝香連理草でも、櫻草でも、鶯草でも、ロベリアのやうなものでも、温

室の蘭でも、御好み次第の花を取り合して、一つの竹串、(團子串の三分一)の足へ取り付け、水苔か脱脂綿へ水を馴染ませたものを巻き、其上から細い針線で縛る事、凡て前例の通りにし、然る上に竹を切り捨てる或ひは竹串を切り捨てから、水苔を巻くのも有る、斯して金貝(鉛紙、錫紙といふもの)を以て根を包み、ヘーアピンに針線でしばり附けると直ぐ立派な簪が出来る、此簪は其根元の水苔の乾く迄は萎れる事がないから、外出から歸つて來たら、茶碗の中へでも其儘投り込んで置くと二日三日は保つて居る襟挿も又此拵へ方で宜しい、只男と女と老幼とによつて、大いさや、色合などを注意するに過ぎぬのである。

此外卓上の敷花、花束室内全部の裝飾花、額縁等色々の仕方があられるけれども、要するに盛花の精神をさへ會得すれば、誰にても出来る事である、

盛花は外國の植物でなければ出来ぬやうに思ふと大違、其處等の花商で賣つて居るので澤山である。

婦人の手すさび

簪は造花にのみ限らず

花と婦人とは如何に深き關係を有して居るのであらうか、洋の東西と時の古今とを問はず、婦人は必ず花によつて飾られて居る、文明國も未開地も、こればかりは異なる點がない、巴里の眞中にも花簪が有るし、蠻界の婦人の髪にも一輪の野花は咲いて居る。苟しくも婦人が緑の髪を束ねる場合には、假令木の枝草の莖なりとも、植物性の物を挿すので有る。太古天神が天の岩戸に隠れさせられた時に、神いさめの樂を奏で、天の鈿女命が舞をした、其時に命が首から肩を越して係させられた粧飾は石松であつたといふ事である。石松は石松科の植物で、今日でも山

地へ行けば、青々として蔓延し、翠々として垂れて居る所の隱花植物であるから、麗はしき花こそなければ、其緑の鮮かなる事は、紅紫絢爛の花より美しい。

下つて世が追々開けるに従つて、衣服の模様にも、帶止の金具にも、指環にも、櫛笄にも、粧飾模様と言へば殆んど花である。

今日小間物屋の店から、花を引去つたならば、能く店を開け得る家があるかと思はれる程、簪には花を使用して居る、只生花の代りに造花を用ゐる丈である。

簪は何が故に造花に限るか、生花は簪に用ゐる事が出来ぬかといふと決して然る理由はないので有るが、造花は自ら手を下して造らずとも、何處でも賣つて居る、幾年置いても枯ないといふ此二つの點が、世人の嗜

好に迎合したので有る。眞正の美は矢張生花でなければならぬ、如何なる名工が造らうが、如何なる名手が剪綵まうが、造花では生花の如き潤澤を見る事が出来ない。假令天下の名作としても、實物の模型で、造花は何處迄も造花である。

然らば生花の簪は何處で得られるかといふ問題が起るが、生花は決して人手に待つ事は出来ない、何處迄も自己の手で造らねばならぬので、夫を面倒と言はるれば夫て話は絶て了ふので有るが、手藝の一端として、趣味有る生花の簪を、烏雲の如き黒髪に飾らうと思はる、ならば、下に記す所を一讀したまへ。

何故に生花の簪は流行せぬか

何人でも生花を嫌ふ者はない、假令個々の花に就いて好悪は有るとも、

凡ての花を厭ふといふ人はないので有る、然るに生花を使用せぬには必ず理由が無くてはならぬ、曰く生花は直に枯る、之が第一の理由で有る曰く散り易し、曰く莖の切口を隠す能はず、曰く如何にすれば萎る、事を防ぎ得るか、是等が凡て解決されない爲に、何人も手を出さないのて有る、流行せぬのも此原因に外ならぬ。今一つは以上が了解したにして、も、拵へるに手数が懸るだらう、時間を要するだらうと、此だらう的憶測の爲に多少の氣は有つても手出しをせぬので有る。夫から婦人の後入的思想は、人のせぬ變つた簪などを挿したら、何とか言はれやせぬかといふ入ざる心配と、卑怯な虚榮心は、生花のやうな金の懸らぬものを挿して居ると、人に卑吝のやうに思はれるといふ理の解らぬ見榮を出すから、實に迂愚の限りて有る。これでは花の趣味なるものは、到底解る

ものではない。

生花の簪は西洋花に限らず

折角生花の簪を造らうとしても、「妾の所には西洋花が少ともムいませんもの」といふ啣語をする人が有るが、生花の簪は西洋花に限るといふ勅令が發布された理ではないから、其處等に咲いて居る野花でも、庭の花でも種類は少しも選ばぬ、只色の配合と、色の大小形状と、葉の形や色氣が適合すればよいので有る、其西洋たると東洋たるとは、簪たるに少しも好悪はないので有る。

生花の簪に必要な品

愈々生花の簪を造るとなると、定めし道具が入用だらうと思はれやうが、一々數へ立したら、成る程數が有るけれども、凡てが有り合せて間に合

ふので有るから、至つて造作ない。

銀紙 (鉛又は錫を薄く伸したるもの、亞米利加烟草の包紙に慣用する)

水苔 (細葉水苔ならば更に可なり、乾燥して使用する。蘭科植物等を栽植するに用ゆる品。)

針線 (絹絲の如く細き者、眞鍮、銅等を可なりとすれ共、鐵線にても可し。)

竹串 (簪の如く細きもの。)

筆 (細き水筆を洗ひて糊を落し、刷毛代りに用ゆ。)

髪針 (鐵、白銅、アルミニウム、銀、護謨等、各自の好む所に從ふ。)

以上の必要品の説明をすると、銀紙は花の根を巻く粧飾用に供するもので、花の根に水苔を附けて、水分を持たせるから、其水苔の露出する不體裁を隠すので有る。銀紙は造花店に非ざれば、金物屋に在り、厚薄一様ならず、適宜のを買求むべし。

水苔は乾燥したのが植木屋へ輸入されて居るから夫を少し預けて貰ふがよし、然らざれば脱脂綿、海綿等を代用するがよい。花簪用としては海綿の方寧ろ優るかと思はれる。適宜に水を啣ませて、其中に花の根則ち切口を挿込み、頭上にあつても、絶えず水分の供給を受け得られる。針線は花を集めて集ねるに用ゐるし、又髪針へ取附るに使用してもいい糸でも代用されるけれども、糸は少し使ひ悪いかと思ふ、これも造花材料屋か、金物屋に在る。

竹串は團子の串を削つてもよし、何を用ゐてもよいので、花柄を針線で縛る時、脆弱の花柄は時として針線の爲に千切れるから、竹串を一本添へて縛ると、其憂ひがない。

筆は花や葉の埃を拂ふので、口で塵を吹いてもよいが、或ひは葩を散したり、或は粘着して取れぬ事が有るから、其時に筆の穂で拂ふので有る。

以上の道具が揃つたらば、是から花簪の内職を始めやう、鋏などは有合せの花鋏を用意すれば澤山で有る。

花は何時切るか

花を切るには、朝でも午でも夕でもよい、必要に応じて随時に切つて差支へないけれども、夏の眞盛は日中に切らぬ方がよい、凡て朝開いた許

りの勢ひのよいが可いに極つて居るけれども、更に一層よいのは、枝ごと切つて、夫を花瓶に挿して、十分に水を揚げた後に、花柄を切ると、花の持ちがよい。

萬一如何にしても直ぐ萎れる花であつたら、花柄の切口を、一寸酒精か焼酎に浸すと、必ず萎れないので有る。

色取の工合

小さい花でも大きいのも、其人々のお好み次第で、夫が一種の時は格別、二種も三種も寄せる場合には紅白紫黄と、見た目で配合を可く造らねばならぬ、然し花だけでは、充分配色を嬢娟たらしむる事が出来ぬから、緑滴る葉を用うる。然するときは、頭髮の黒に對して、麗しい翠色があり、夫に紅白の花が添へられるから、凡ての色が格別に引

立つので有る。

葉は如何なるものを用ゐるか

花の事は前に言つた如く、和洋を問はない、秋の庭で言へば、敗醬、桔梗、鳳仙華、玉簪花、山葡萄、野菊、蘭草、紫苑、澤瀉、一枝黄花、穀精草、沙參、大波斯菊、姫鴈來、藍蓼、夕蛾菊、茶花、秋海棠等、庭に咲いて居るもので澤山有る、個々に花の美を求めんよりは、配色の美ならん事を欲するので有る。

新橋停車場で賣つて居る襟挿を見ると、凡て西洋花である、天竺葵、麝香嬰麥、西洋堇、香水木等に限られて居るやうだが、餘りに智恵がなさ過ぎ、日本在來の花で、十分に使用に堪へる者が、帯で掃く程澤山扣へて居るので有る。

夫から葉を使用するには、花との對照上、成るべく細かい葉がよい、花簪の臺座もどきに、大きなを用ゐるもよいが、花より抽出して居るには、是非共細かい丈釣合がよい、例せばアジアンタムといふ羊齒、アスバラガスといふ絲のやうに細い葉の植物を使用するが、由來日本は羊齒に富む國で有るから、西洋のアジアンタムを用ゐずとも、上等のものならば石長生、鳳尾草、茶筌羊齒のやうなものが有るが、手近の陰濕羊齒、虎の尾羊齒、魴羊齒の類で澤山有る。是等は庭の隅や崖などの陰地に生へて居る、アスバラガスの代りに天門冬でもよいし、又偃栢槿(そなれ)てよいので有る、其他折鶴蘭(ちやうらん)の斑白葉なども頗ぶる妙で有る、要するに花との對照さへよければ、如何なる葉でも差支ないので有る事は、花の和洋を問はぬと同じで有る、技術さへ旨ければ、石

塊を變じて黄金にする事も出来るであらう。

花簪の手製に着手す

花と葉と揃つたならば、花簪製造の順序となるが、先づ葉を先に取つて、次いで花を添える、(葉と花の丈は各自の好みに従ふが、餘り大きいのは蓋し野暮である) 夫から花の根へ竹串を添えて、夫を花柄ぐるみ前の針線で巻き、根を揃へて切り、其次には少し潤した水苔を矢張針線で縛るので、成る丈團子的ならず、圓筒形にする様にせぬと體裁が悪い。夫が濟んだら、其水苔を今一度水に浸して、水分を啣ませ、然る上に銀紙で巻くので有る、銀紙の上部が落附かぬ場合には、又針線で巻くのも宜しい。

今一層上等に行けば、髮針に白銅鍍金の極めて薄い鐵葉をハンダ附にし

たので、銀紙の上部を巻けば其儘簪になるので有るが、日毎の御手製は夫にも及ぶまい。

斯くして出来上つたのへ髪針を貫とも、又其股へ挟むともして、束髪へ挿すので有る。充分水を持たして置けば、一日は大丈夫持つ、夜寝る時茶碗へ水を入れて、夫を挿して置けば二日三日は持つだらうが、夫は抑も無性の始まりて、明日は又新規なのを造るがよい。

生花簪の匂ひは如何にするか

假令香氣ある葶薔薇香水水を用ひたにした處で、一輪か二輪で有るから到底人にも自分にも解るやうな匂ひはない、其處で匂を附るのは甚だ卑怯で有るが、香水精を一滴し花の上へ落すもよし、普通の香水を香水吹てかけるもよい、異香馥郁暗に情を率くやうな細工が出来上るので有る。

日本室の花卉

往古の室内裝飾

古來室内裝飾用の花卉としては、只切花を用ゐるのみで、今日の如く、盆栽鉢栽などいふものを、陳列する事をしない。盆栽類は必らず庭前の壇に置くか、或ひは椽端に飾る位が關の山であるから、古渡の交趾に金錠といふやうな贅澤は、足利で東山公、徳川で十一代公の豪奢を以てしても、夢想にだもなかつたのである。

其代り切花を用ゐて、所謂活花挿花にする事は、都鄙共靡然風をなして恐く花卉と名の附くものであつたら、直に活花にされ、生態の儘よりも一層美化されぬといふ事はない。穀積のやうな者でも、其實附が立派に

床の間の粧飾になるなどは、全く此挿花の技術に因るものであるから、従つて其方式にも、種々の流儀が出来て、遠州とか、池の坊とか、微笑とか、青山とか、殆んど枚擧に遑あらぬ程である。然し其方式こそ異れ、挿花の真髓、所謂奥儀なる者を糺ねると、挿花は必竟切花を自然の状態に活けると言ふに過ぎぬ。則ち切つた花を盆栽にするのである。夫から根のある者を用ゐたらよい譯であるけれども、自然の状態に據つて、自然よりも更に美ならしむる所に、挿花の妙は存して居るので、頓て種々の流派が出来たのも、此妙を捕捉する捷徑を、各方面から搜し出した爲である。然し此挿花といふものが、今日では空しく片隅へ斥けられて、或儀式か慰みの御替古の外に用ゐられぬのは、今日の宗匠が、形式に斗り流れ、

徒らに先人の遺型にのみ拘泥して、時勢と共に推移しない、則ち活きた花で無く、死んだ花にして了つたから、折角の挿花法も、空しく憾軻不遇を歎ずるといふ始末で、挿花法を賊す者は、今日の宗匠一輩である。

盆栽

挿花が頽れたからと言つて、先天的花卉を愛する我大和民族は、一日も花卉無しでは居られぬ所から、挿花なら無雑作の投入、一輪挿などいふ簡便なところが流行する様になつたけれども、更に驚くべき勢を以て、天下を席捲せんとしつゝあるのは盆栽である。従来は庭前か、椽端を飾るに過ぎなんだ盆栽は、一躍して、床の間、違ひ棚といふ處まで上座するやうになつた。此動機といふものは、明治の初年に、文人畫の山水が流行した頃、軸斗りては床が寂しい、置物も年

中一つ羅漢斗りではといふ處から、文人畫に相應する春蘭、寒蘭、松、竹、葦などが、喜ばれたのに原因して、下つて昨今は、盆栽に對する趣味が一變して、昔は樹振斗を眺める爲であつたのが、今は樹振に因つて、山野綿渺の風致を掬し、詩趣の横溢を壺中の天地に搜らうといふのであるから、趣味は向上したには違ひないが、盆栽の責任といふものは非常に重くなつた理である。

开着山野の景を一盤の裡に藏めやうとするには、勢ひ深鉢では工合が悪いから、薄い廣いものにする。是が平鉢流行の原因で、今日では懸崖物で無い限りは、全く深鉢を用ゐぬといふてもよい。

西洋人が盲目の垣覗きの癖に、日本の盆栽は樹木を不具にするといふ、業に或佛蘭西人は、某園藝會の席上で、頻りと此説を稱へたさうで、聞

いた人も感服したさうであるけれども、これは盆栽の趣味を知らぬからである。成程盆栽は樹を矮感せしめるけれども、不具にするのではない美化するのである。恰も西洋人が人工煤助を行つて、單瓣を複瓣にしたり、白花から紅花の變品を得たりするのと同じで、いづれも美化するのであるから、少しも差支はない。

西洋草花

盆栽に次いで、西洋草花の鉢栽、及び其の切花を西洋風に盛花にするか、又は無雜作に花瓶へ投ずる事が流行する。

盆栽と西洋草花とは、全く積極消極で、一は妖冶なるが故に愛せられ一は遼雅なるが故に喜ばれる、併し此正反對の二者が併せ行はれるといふものは、小學先生が言ふ積極消極の理で、大なる反對は大なる一致

となると言ふ堅白異同の論理に歸する、左様なると中間の日本在來の草花が全く忘却せられて了ふので、稀に山草會、野草會などいふ物好があつても、僅かに一部の道樂に限られて了ふ。

西洋草花を好む者に幾通りもある、第一が高襟組、第二が珍らし物好、第三が體裁飾、第四が友禪好みといふやうに類別して見る。

第一の高襟組は、例の西洋莖黨で、これは花を愛するといふ點から、莖を好むのではない、愛とか戀とかいふ怪しかる意味から机邊を飾るのであるから、斯ういふ人に買はれた莖こそ災難、水も行らねば夜露にも當ぬ、忽ちの中に涸々に乾上げて、戀愛の木乃伊を幾鉢も拵へるといふ始末で、少しも恃みにならぬ花好である。

第二の珍らし物好といふのは、西洋草花が日本のより目新しい、少くも

御自身だけには珍奇である、只何となく珍らしい様に思はれるので、無性に難有く尊いやうに思ふ。然し只珍らしい斗りなら、西洋どころか、直ぐ其處らの西洋草花店に、箒で掃いて、箕で捨てる程轉つて居る是等の草花よりも、日本の布袋蘭とか、戸隠升麻とか、裏白金梅とかいふやうな方が、遙かに珍奇である。布袋蘭の如きは、鐵の草鞋で尋ねても、先づ絶望であるから仕方が無いとして、戸隠升麻や、裏白金梅、杜鵑蘭雲間金鳳花などいふものは獲られぬ事は無い、然るに外國は元より、其産地の日本で、是等の草を持つて居るのは、十人と無いのであるから、單に珍奇といふ點より言ふならば、此方が餘程珍らしい。

第三に體裁飾り、これは兎に角西洋草花を絶えず室内に飾るには温室が必要であるし、又一方からいふと、熱帶蘭科などになると随分高價であ

るから、是等の植物を室内に飾つて置くと、どうやら金持ちらしく思はれる、又一派の人から見ると、高尚らしく見えるといふので、是非とも無くてはならぬものとされるが、是等は愚の極である。

第四の友禪好みの連中は、風致も韻雅も、一切構はぬ、只花さへ美麗なら善いといふ質で、衣服は何でも友禪縮緬に限るといふと同じこと、三十振袖四十島田、後から草鞋に見舞られぬのが見附物である。

日本草花

斯くは言ふ者の、自分も西洋草花は大好きで、蝸牛の殻程な温室の中にフアレンブシスや、バイナフシイス、デンドロビウムの三四鉢を持つては居るけれども、決して此西洋の花から、日本の趣味を得ようといふのではない、西洋草花は西洋草花、日本草花は日本草花の韻致を持つて居

るから、日本室内の裝飾とするには、西洋草花はどうも調和しない、日本のならば十中の七八は、襖、床の配合と能く釣合ふけれど、西洋のを持つて来ると、十中の七八迄は調和しない、七八は同じ七八でも、釣合ふと合はぬでは、大變な違ひであるから、自分は日本室の裝飾として、是非とも日本の花卉を採用せられん事を望む。

譬へて見れば、福壽草でも、決して黄金色の一種のみではない、野生品としては、普通の福壽草の外に、北海道には枝打福壽草が有り、園藝上の變品としては、斜子咲、段咲、白花、紅花等があるけれども、西洋草花にのみ凝る人は、アネモネの變種は知つて居ても、福壽草の變品は知らぬ、丁度西洋崇拜の學者が、倫敦の面積を御存じでも、東京のを知らぬと一般である。

夫から日本では羊齒類を床飾にせぬけれども、西洋では盛んに之を遣ふ
温室壇の椽飾りは勿論、盛花にも花環にも用ゐる、これは色彩の配合上
から、紅黄紫白の間に、緑を交ぜる爲であるけれども、此羊齒類は、日
本室の床飾にも非常によい。

然し羊齒といふと、西洋草花好は、アジアンタム屬より外に無い、日本
の野生には見る事も出来ぬやうに思つて居るけれども、同じアジアンタ
ム屬でも、日本の孔雀羊齒の如きは鳳尾蕪として、翠蓋靜かに垂れた
る様は、實に立派なもので、到底盛花のメーヅン、ヘーアの比ではない
其外二百幾種の羊齒の中、大きいものなら子持羊齒の四尺有餘から小
いのなら、姫裏白、大久保羊齒の僅かに寸を出ぬなど、大小御好み次第
である、昨今滿目荒涼として、朔風蕭殺なる時、是等の翠葉碧蓋を座間

に見るなどは、反つて百千金の熱帶蘭科を見るよりも興があらうと思
ふ。

婦人の樂み

殊に盆栽やら花卉やらを扱ふ事は、婦人の緻密の性質を借る方が、男子
の疎雑なのよりは遙かによい、婦人ならば、一柯一葉丁寧にあしらふけ
れども、男子となると、面倒が先へ立つて、焼めたり、直したりする事
が、荒々しいので、兎角莖葉を毀損する、且又男子は兎角外に斗り出る
から、不在を預かる婦人が世話をして遣らぬと、草木は餓しい思ひをし
たり、食傷したりする憂目を見るから、婦人の慰さみとして、花卉を
培養する事を切に奨める、第一無骨な男が花の側に立つて居ては畫にな
らぬ、どうしても窈窕たる婦人でなければ、花と釣合はぬのは、雷に男

子が見る處のみではない、婦人が見ても矢張左様であらうと思ふ、然し婦人から見る時は鬼を欺むくやうな我々でも、男の方が似合ふとあらば此項は抹殺する。

婦人と花模様

婦人服の裾模様は、其様式の如何によりて、品格を優美にもし、又疎野にも見せる、所謂粹で高尚なるも、野暮で下品なるも、多くは模様が興かつて力が有る。

江戸棲にせよ、總模様にせよ、模様の取材は、森羅萬象の事物を拉して光琳式にも、有識式にも、ヌーボー式にも、好む所に任せるのが自由であるから、強て植物と動物、果又器具と景色とを選ばぬけれども、女の女らしく優しい、雅嫺な風姿を發揮し易いのは、花を取材の目的としたのが、如何にも相應しい、従つて在來の模様の十中七八迄は、花を用ゐるやうて有る。

花の美と婦人の美とは、如何なる場合にも相一致する、爛漫たる櫻花の下にも、寸憐なる莖菜の傍にも、婦人の行住するのは直ちに畫になるけれども、鬼を欺むく魁偉の男子は、多くの場合に花の風情を傷つける、殊勝らしい花と、優しい女とは、能く同化するが、男の毛だらけな手に姫百合を携へるなどは、宛ら水と油とを混淆するが如く、到底融和するものではない。

斯る單純な見地からしても、婦人の衣服に花を用ゐるのは、極めて妥當な趣向で有る、然し同じく花を取材とする上に於ても、丸顔と顔長と、肥つたのと、瘦せたのと、夫々自己の丰姿に照應する花を用ゐる事は、頗ぶる注意すべき事であらうと思ふ。

瘦軀のスラリとした、江戸前式の女は、如何なる模様も、能く着こなすけれども、丈の低い肥つた女となると、模様を選ぶ上に於いて、十分意を凝さねばならぬ、勿論斯る女は、衣服のみならず、頭髮の飾りや化粧履物に到る迄、江戸前式の女より、粧飾に於て骨を折るには違ひないが其折方がどうも穿き違へた所が多い爲、折角の苦辛も反つて醜さを添える媒介となる。例へば履物なども、丈の底い人に限つて、必らず無法に高い駒下駄を穿くのが多い、要は下駄の力を借りて、丈を高く見せる積て有らうが、反つて夫が不平均な醜しい者になつて、少しも調和されない、下駄は下駄、人は人と、全く個々獨立の別物になるから、凡て相當な釣合を失はぬやうに注意するのが必要であらう。

裾模様にとつても、又夫と同一徹で、丈の短い人が、垂枝柳や、竹のやうに垂直に懸鉤する植物に取材すると、裾模様のみが飛放れて丈高く反

つて、本人の丈の短かいのが反つて著るしく目に立つの嫌ひがある。斯る人には董菜、福壽草、一輪草のやうに、高さが短かくして、比較的花の大きな植物を、成るべく裳に近く置くやうにすると、自己の形と平均して、極めて巧みな調和が取れる。

之は僕が多年竊かに考へて居る所で、慥かに甚だしき過ちは無いと思ふ。

夫から近來往々にして、花の本性に反した模様を染出した衣服がある、之が普通の鞆吳服屋のなら格別、第一流の吳服店で意匠を凝したもので對生の葉を互生にしたり、下向の花を上向などに描いて、吳服屋も着る人も、一向平氣で居るのは、頗ぶる慥然たらしめる。

勿論寫生ではない、模様化したものでは有るが、さればとて、櫻なり、

牡丹なり、一見して識別される畫で有つて見ると、餘り本性を破却したものは好ましくはない。

模様の事で有るから、色合は己むを得ぬが、花の本態だけは、實物に背反せぬ範圍に於て、模様を組織されたい。例へば對生で有るべき楓樹の枝を互生に描出し、山小菜の如く、下向で有るべき花を上向にし、木蓮の如く花の底部を北にして南開する花を、普通の花の如くに寫し、六瓣六雄藥なるべき百合を、五瓣にも七瓣にも、筆都合に任せ、雄藥の數などは、殆んど眼中に置かない、斯の如き模様は、美人にして不具者なる如く、折角の趣向も、趣味索然たるを覺える。

些事ながら、婦人の好みといふ點に於ても、斯る不具なる模様を染めて恬然たるは、其人の人格も思はれるやうな氣がして、興をさますもので

有る。敢て着道樂の婦人の一顧を冀ふが爲、婦人と花模様はなまように就いて、微意びいを述べて不遜ふそんを顧りみぬので有る。

榻上雑談

植物の威力

植物しょくぶつの力ちからといふものは恐ろしき迄に凄まじいもので有る、軒のきの雨滴あまだれでさへ、石いしを穿うがつから無理むりもないが、嫩ふたばにして伐きらずんば斧おのの用もちゐるの憂うれひありとは能く言つたものだ、近い例れいが盛岡もりがわ名所なしょの石割いしわり櫻さくら、彼は櫻さくらの成長せいちょうする力ちからによつて、終つひに山やまの如ごとき巨石きよせきを割わつて了しまつたので有る。或あるひは向島むかうじまの櫻さくらの根ねが、塙どてを網あみの如ごとくに弱からめて、自然しぜんの柵しがらみをしたので、今度こんどのやうな大水おほみづが出て、塙どてをしてビクともさせない、是等これらは植物しょくぶつの偉大たいなる力ちからではないか。南米なんべい一の大河たいがなるアマゾンの上流じやうりうには百里ひゃり近くに渡わたる原生林げんせいりんが有る、大樹たいじゆ森々しんくとして晝尙暗ひるなほくらしなぞいふ形容詞けいけいしがあるが、此處こゝなどは大

樹森々として晝有るを知らずと言つてもよい、全く太古遼遠の世に戻つたやうで、日光といふものは殆んど徹さない、然るに此邊の植物の成長力の旺盛なる事は言語道斷で、若しも樵夫などが森の畔の清流を選んで、其處の石上に小舎を建て、棲むと、二月ならざるに、忽ち葛蘿の爲に小舎を搦め倒されて了ふので、已むなく交代に張番をして、絶へず伸長して來る蔓を伐り捨て、居る位で有る。猛獸毒蛇の害も恐ろしいが、夫は偶發的で有るし、又火を焚いても防げるが、間斷なき植物の攻撃には、如何なる勇士も精が盡て了ふ。讀者或ひは眼に見える程に迅速な成長をする植物が世の中に有るかと言はれるか知らぬが、狭いやうでも廣い世界、随分變つたものが無いでもない、現にカラカスの植物園で試験した晝貌の一種は、六ヶ月に六千尺迄

其蔓を伸したと報告されてある、さうすると一時間に一尺以上宛も、延長して行く理だから、肉眼でも見られるので有る。これでは側に附いて居て、片端から伐り捨てなくては、小舎位は直ぐ搦められて了ふだらう。

植物の年齢

三千年に一度花咲く桃の有るかと思へば、一年で枯れて了ふ草も有る。動物でも同じ事で、朝に生れて夕に死ぬ蟬もあれば、萬年の龜、千年の鶴も居る、千年必ずしも長しと言ふ可らず、一日必ずしも短しと言ふ可らず、彼の千年も、是の一日も、人間から見ても長短の別はあれ、彼等には均しく一生で、甲は一日の中に立派に生殖機能を果して役目を終るけれども、乙は千年の年處を経なければ、充分自己の役目を果す事

が出来ぬので有るから、千年の壽ありと雖も、一日の短かさを嗤ふ譯には行かぬ。

然し從來世に知られた長齡の樹としては、カリフオニア州の松である、直立の高さが四百九十尺、抱百三十尺もある、曾て千八百六十六年に、此一群の老松林中に風損して仆れた者があつたので、輪限にして其年輪を調べたら四千年から経過して居たといふ事である、其等の中には、幹に空洞が出来て、通り抜が成るやうなのが有る、甚だしいのは二頭立の馬車が通行されるといふ、もう少と大きかつたら、人道車道の區別も立てられるだらう。

夫から根元から吹き折られたので、中心の空洞になつて居る處を、一騎兵が鞭を擧げて六十五尺の奥まで進み、其處で立派に馬を廻して歸られた

といふ記録が有る。之を以ても年處を経る事の久しいのが解る。

争ひの杉

箱根の矢立杉は曾我兄弟が仇討の紀念を止め、板橋の縁切榎は今も迷信者の跡を絶たない、化銀杏、連理木、數へ来れば此の如き歴史や、俗傳を有して居る老木が澤山ある、西洋でも羅馬の月桂樹の逸話とか、エブロン

のタアペンタイン樹とか、古譚神話に富む者が幾らも有る。諸君が知る道灌山の争ひの杉といふのも、面白い物語を傳へて居る。杉の所在地は、田端の停車場から山へ上つて、右へ三四丁行くと、畑の中に矗立して居る老杉が夫て有る。(此頃枯槁したが)

今日てこそ一見杉と見えるけれども、十五六年前には、今よりも遙かに繁茂して居て、遠見には松としか見えなんだ、然るに此杉は昔も矢張り

同じ概形であつたと見えて、元弘三年に新田義貞が北條氏を鎌倉に亡ぼした時、使を發して捷を本國に報じさせた、此使者の一行中に、落伍して後から馬を打たせて來た二人の武者が有つた、途中夕暮になつて、此道へかゝると、偶と例の杉を見附たので、甲は馬上ながら伴を顧みて「立派な杉じゃな」と指さした、乙は怪訝な顔をして、「何が杉だ、彼は松といふ樹よ」と嘲笑つた、いや杉よ、いや松よと、言葉の行違ひが加はつて二人はムキになつて争ふたが、此處で論をするよりも、樹の下へ行つて見た方がよい、其代り若し松であつたらばと乙が言ふと、「おんてもない事、首を賭物にしやうぞ」と甲は力む、「左れば貰ふぞ」お主こそ」といふやうな譯で、今迄の朋友は俄かに吳越の敵となつた、爾して樹の下へ行つて見ると、果して杉で有つたので、松と見切つた乙は、約束

の如く首を取られて了つた。人の命を塵芥とも思はぬ戦國時代で有るか、一場の戯れて首を取つても取られても不思議にも思はぬ、然し此事あつてから、争ひの杉といふ名が今に残つて居るので有る、此杉若し心あつたら、古往今來の世の變遷を何と見るであらうか。

手提の温室

手軽に出来る慰み

騙されて咲く室の梅といふ俗謡が人口に膾炙するのを以ても、昔から審を用ゐて、不時に花を促開せしめたといふ事が知れるが、其頃の審は、即ち士審で、今の温室の如く、大規模の構造でもなければ、無論蒸氣を通すといふ設備はないにも拘はらず、審の梅が騙されて咲いた程で有るから、今日吾人の庭園に於ても寒中花を咲かせやうとするに、必ずしも數千金を投じて、宏大の設備をせずとも、特殊の産物でない限り、太陽の光熱で、昔の土審式よりも、多少進んだ促開法を行ふ事が出来る。

夫も庭園が無ければ、此方法が執れぬといふ事である、極めて臆却て有るけれども、實は狭苦しいのをさへ耐忍すれば、物干の上でも、出窓の先でも、乃至は縁側の隅でもよい、日射のよい軒下などは、更に好都合なので有る。

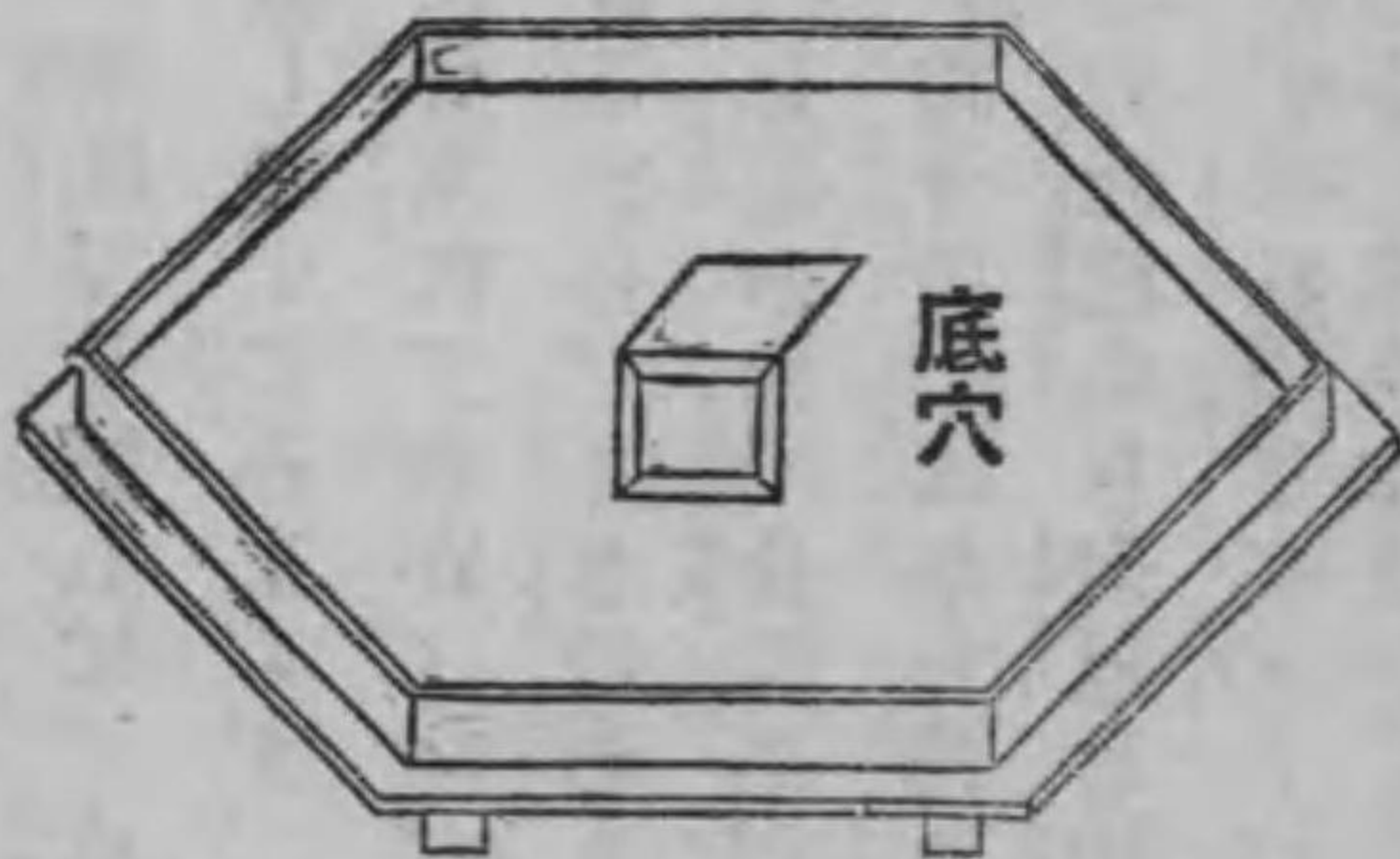
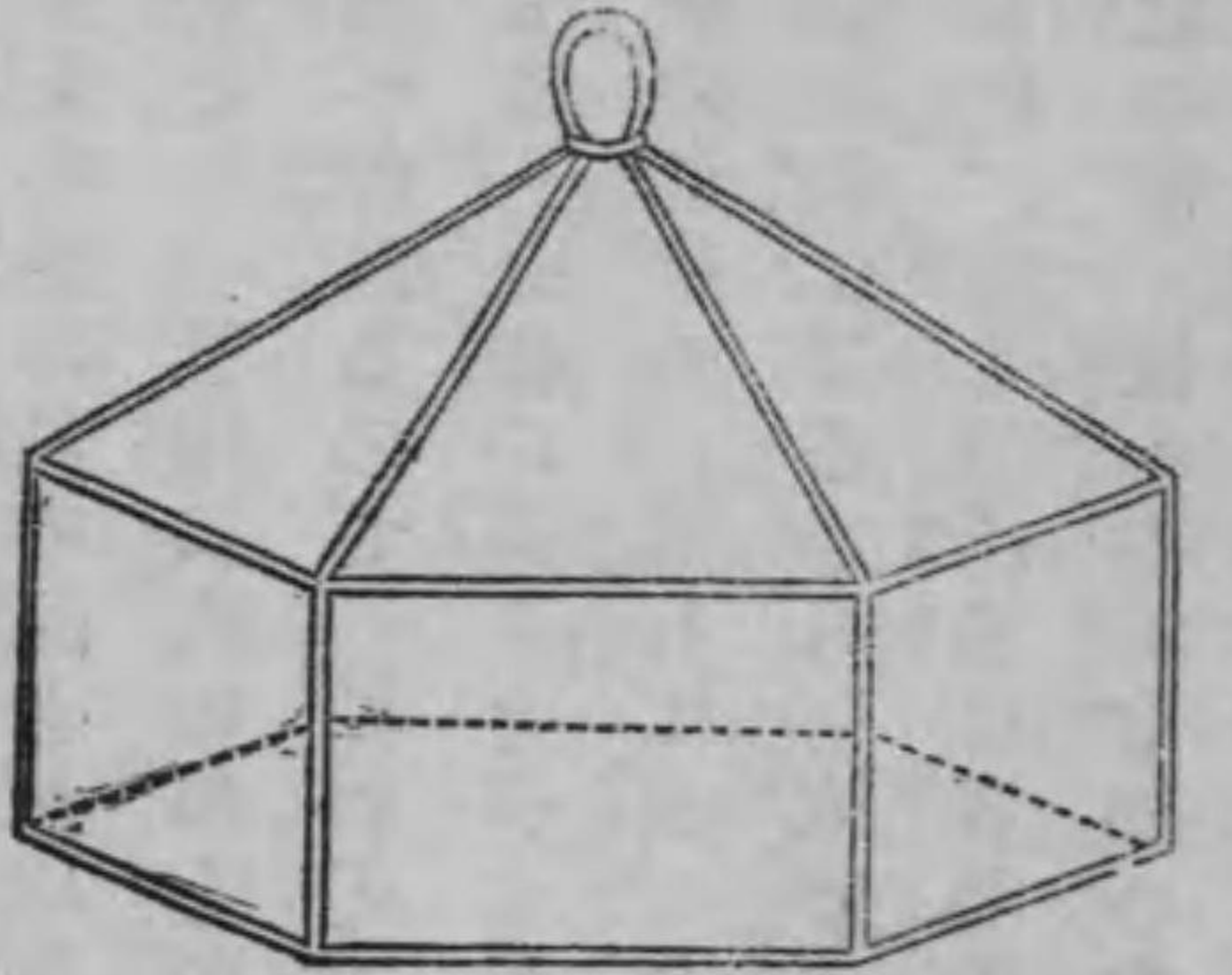
西洋では是等の需要を充す爲に、手提温室といふのが出来て居る、夫は圖の如く細く薄い金屬製の棟梁に、硝子を嵌めた者で、底は亞鉛板が張つて有る。亞鉛ならば絲底から滴る水を受けて、夫が又蒸發し得る便宜が有るから、若しも板を用ゐると、水分が木理に浸潤する、従つて腐朽し易い虞が有る。

これは極めて簡易な方法で、播種、挿木等の蕃殖用に適すると共に、堇、福壽草、雪割草(スハマ)、松雪草(スノウ)、等の、小さい草花を促成させ

るに工合がよいから、一寸家庭の慰みに、夫人令嬢が手すさびともなるであらう、此種の小温室は未だ我邦では造つて居ないが、之を造る事は全く造作ないので、圖さへ拵へて遣れば何處の鐵葉屋でも造つて呉る、何も裝飾的に、白銅鍍金の輕金屬を以て骨を編ずとも宜しいので有る。圖は六角型になつて居るが必ずしも六角で無ければならぬといふのではない、各人の適宜でよいが、六角型は光線の徹底する工合が適度に行く圓筒や四角は取扱上にも不便で有るから、此型を用ゐたので有る。圖中の梁や桁は、亞鉛か鐵葉で澤山で、頂頭に環を附したのは、持運びに便する爲で有る、硝子は各間毎一枚の硝子を用ゐる、此小さな温室の家根を葺くに、板硝子を重ねるなどは、無用な洒落で、少しも利益する所がない、此温室の大きさは、各自の好む處に従ふがよいが、先直徑二尺五

寸乃至三尺で、夫以上大きくなると取扱ひが悪い。

予が創意したる手提温室



手提温室の底

底は充分にすると二寸四方程の穴を明け、底の下に今戸焼の火鉢へ炭團でも埋けて夫から火氣を通はせる夫で火氣を用

ない時には蓋をするやうに、豫め蝶番の鐵葉蓋を附けて置くか又は只の

趣味と 四季の園藝

置蓋にてもよろしい。又炭團の火も成るべく弱くして、火氣は凡て此穴から室内へ昇騰するやうに、火と底との間に、鐵葉製の圓筒型のもの、譬は茶の罐の蓋の底を抜いて、其圓筒を通して、火氣が内部へ通ふやうにすると、無用に火の氣を消費しないのみならず、温度が極めて平均に室内へ行渡るので、植物の爲に非常に都合がよい、夫て穴の縁も室内に於ては三分程の高さを有して居るから、冗水の滴り落ちるといふ心配が無いので有る。而して又、火氣を要さぬ場合には、蝶番の蓋を閉めるといふ趣向になるから、火の無い時分に、底から冷氣が進入するといふ虞もない、最も西洋の在るのは、此底から火氣を通すといふ趣向が無い、之は聊か僕が新案を加へたので有る。

其處で此手提温室なるものは、日中は日射の下に曝露するから、火氣を

用ゐる必要がない曇つた日か、又は午後四時頃から、朝の七時頃迄、埋め火をすればよいので、夜は勿論室内へ取込むもので有る。全體硝子は温度の放散を防ぐ代りに、硝子面の冷却から、内部の空氣を寒冷ならしむる虞がある、特に此三尺四方にて足らぬ小さい温室では、夜間の冷氣が行抜になるから、一夜たりとも、外へ出し放しにする事は出来ぬので有る。

もやし床

50

促成床の必要

臺所の重寶といへば、野菜が最も必要であるが、其野菜は何處から買入れるかといふと、言ふ迄もなく八百屋である。野菜が入用ならば、八百屋へ駆け附ければ済むと思ふであらうが、只八百屋へ行つた所で、胡蘿蔔午旁が轉がつて居る計り、精々上等な所で、促成野蜀葵か促成薑で、少し捻くれたものになると、東京中の八百屋を尋ねても、中々見附るものではない、之から追々寒くなるに連れて、促成物の必要を感じて來るから、試みに八百屋へ行つて御覽なさい、前記の野蜀葵薑の外、幾干の促成物が有るてしやうか、茗荷竹、芹、獨活位が關の山で有る。然も是

等の蔬菜は、日常口に馴れて居るもので、之を用ゐたからが、人を喜ばせ、自分を満足させる事が出來ない。其處で乙な促成物を造るには是非共自分の家に促成床を拵へる必要が起つて來る、常に小さな促成床さへあれば、日常の食膳に、趣味ある料理を供給する事が出来る、食は生命を繋ぐ爲と言へば夫迄であるけれども、苟しくも旨い物とか、乙な料理をとかいふ望みがあつたら、促成床を設けても損はあるまい。

促成床の構造

促成床などといふと、大層臆怯のやうに思はれるけれども、茲に言ふのは、各自の家庭で間に合せの的に造る方法であるから、大工も指物師も入らぬので有る。开して其面積も、廣い所を要するのではない、疊一疊敷もあれば充分であるが、已むを得ずんば三尺四方で澤山である。且又東

京の真中で地積のない所ならば、屋根の物干でも造れるので、頗ぶる雑作はない。

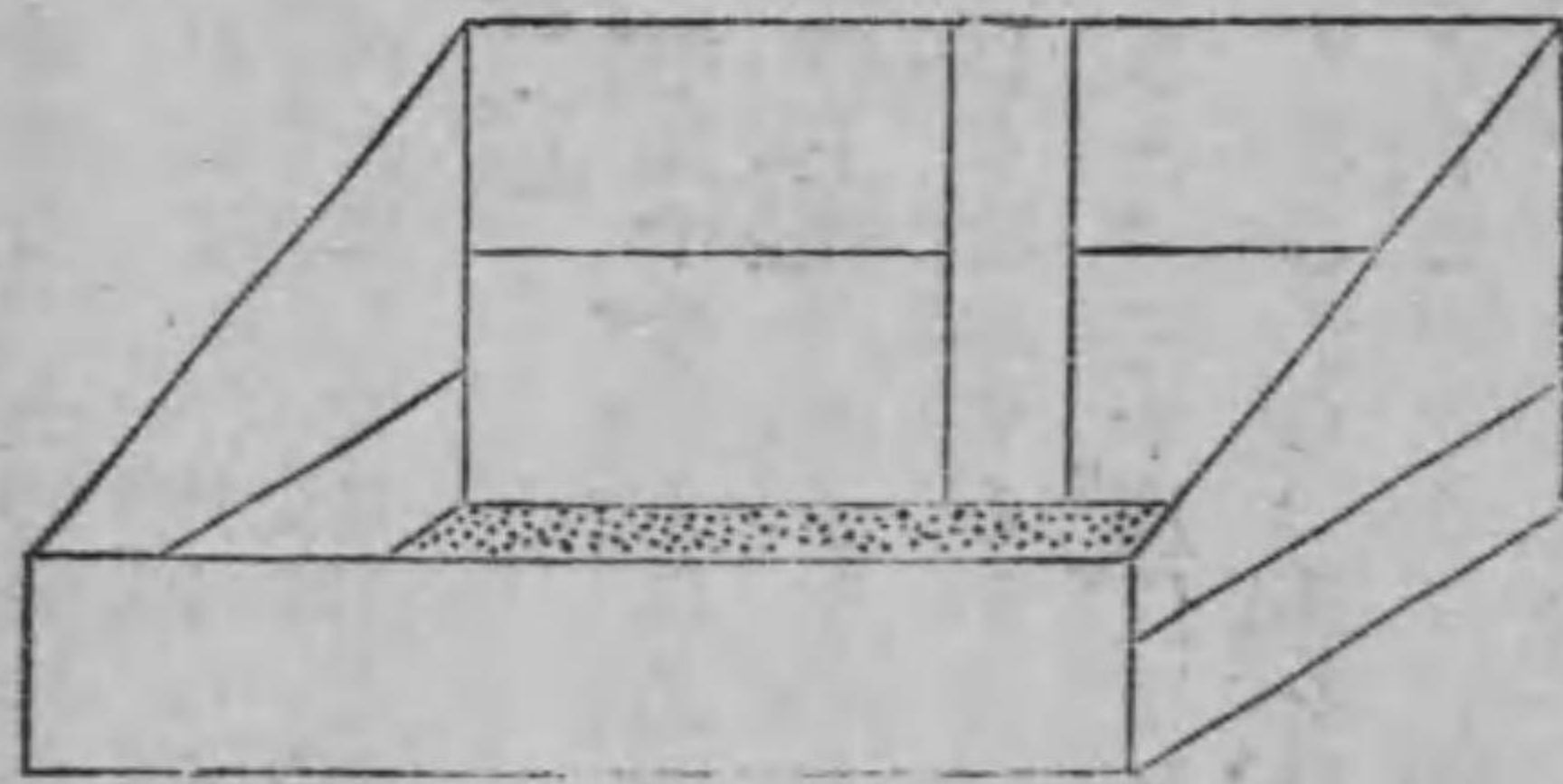
今假に裏庭の隅に、幅六尺、堅三尺の促成床を拵へるとすると、植木屋の方で箱櫃といふ箱を拵へる、之は背板が二尺五寸の高さならば、前板は一尺位で、斜面の勾配を附ける事は圖に示す如くである。

斯ういふ勾配の底無しの箱を拵へて、地面へ据え附けるので有る。夫から箱の中の土は、一尺程掘り下げて、芥土を篩にかけて者を五六寸敷き込み、其上層には、軽い柔らかな土を三四寸の厚さに覆せるので、之で床は出来上つたのである、勿論本式にすれば、蒸熱力を強くする爲に新しき馬糞を底へ敷くので有るが、東京では馬糞や寝糞は得易からざるのみならず、御婦人連には、能く取扱ひ得る者が無いから、之は見合は

せる事にする。

促成床の蓋は如何にするか

箱櫃は出来たが、蓋は何を用ゐるであらうかといふ事は、當然起る質問であるが、此蓋も間に合せならば、古道具屋に在る硝子障子の古を一枚買つて来れば、夫て間に合ふし、左な



箱むろ

くば古障子へ油を引いて、所謂油障子でもよいので有る。詰り此促成床の中には、不時の温熱を造つて、種子の萌芽や成長を促す事が出来ればよい。

空地なきとき

若し一寸の餘地もない所で、此促成床を造ら

うと思へば、箱框へ底を附けて、土の溢れぬ丈の始末をして、物干か何かの日射のよい處へ並べればよい。地上へ据置にするにも、又物干て趣向を凝すにしても、必ず南面にして日射を充分にせねばならぬ。

夜の注意

冬でも此箱框の中は、日中九十度以上に上る事が有るから、左様いふ場合には、框の後、則ち箱の上部の障子を少し明けて過度の熱を放散させるやうにし、夜は又甚だしく冷却するから、障子の上へ蕙をかけて遣るがよい。寒中の夜明になると、三十度以下に降るのが常で、障子面の外氣に觸れる附近は零度にもなるから、蕙を以つて十分に蔽はぬと、折角出來懸つた促成物を枯して了ふ。

促成床へ蒔く物は

楮床丈は出來たとして、何を蒔き附けやうかといふ事は、直首を捻る問題であるが、どうて此床を拵へる程なれば野蜀葵や菜菔では面白くないに違ひない、何か洒落た者をとの御注文ならば、僕は蕎麥をお蒔きなさいとお勧めする。

蕎麥をどうするかと怪しまるゝかも知らぬが、蕎麥の促成といふものは浸し物にしても、吸物の中に入れても、又酢の物の相手にしても、實に好い風味を以て居る。殊に蕎麥の賞美すべきは、其莖の美しき色氣である。丸て紅を差したやうで、切れば中は雪よりも白い、誇大に形容したなら、桃色石英を刻むだか、紅寶石を吉野紙でフウワリ包むだかと思ふやうて有る。

促成床の蒔法と作り法

本来種子ほんらいたねを蒔まくには、成なる丈たけ重かさなり合あはぬやうにするのが法はふそく則すなはちであるけれども、促成もやしど床どに限かぎつては、反對はんたいにビッシリ蒔まき附つけるので、種子たねと種子たねとの肩けん摩ま穀こく擊げきが結構けつこうである。开そして發はつ芽がして少すこし延のびて來きたら、漸だん々くに細こまかい土どを振ふりかけるとよいが、夫それは少ちつと困こん難なんで有あるから、其儘そのま放はな擲てきして適てき宜ぎの大おほいさになつたら、拔ぬき取とつて食用しよくようにする、开そして又また外ほかの種子たねを蒔まくがよい。

豆まめの促成もやし

蕎麥そばに次ついで味あじのよいのは豆まめである、豆まめは先まづ大豆だいづとして在あるが、豆まめの促成もやしは昔むかしから料理りやうりに使用しよくしたもので、東北とうほくでは仙臺邊せんたいへん、西にしでは長崎ながさきなどて宿屋やどやの椀盛わんもりの中なかなどへ入いれるのを見みた。大豆だいづの促成もやしは、一寸ちよつと石い才さい柏はくのやうで、开そして軟脆なんぜいと溶とくる計はかりてある。これも一寸湯ちよつとゆをくぐらして、根ねを揃そろへて切り、酢すと醬油しやうゆを合あせて、浸ひたし物ものにする事ことが出来る。

土筆つくしの促成もやし

以上いじやうの蕎麥そばや豆まめの外ほか、更さらに乙おつな物ものといふと、野のに在あるシホデシホデだの唐杖いたぢなどといふ者ものも妙めうであるが、餘あんまり奇きを強しるるやうで有あるから、此處こゝに土筆つくしの促成もやしを御紹介ごしやうかいする。土筆つくしは御承知ごしやうちの如ごとく、春はるの彼岸ひがんの入いりに、袴穿はかまはいて出でて來くる者もので、摘草つみくさの第一だいいちに指ゆびを折をられるので有ある、之これは杉菜すぎなといふ草くさの花はなで有あるから、杉菜すぎなの根ねを澤山たくさん堀ほつて來きて、床とこの中なかへ入いれると、二三週しうかん間かんで忽たちまち土筆つくしが出でて來くる。然しかし是これは少ちつと熱ねつを多たぶん要えうする傾かたむきがあるから、芥土こみつちを澤山たくさん上うへから蔽かぶせるがよい、开そして根ねを埋いける深ふかさも三四寸さんじゆん位ぐらあつてよからう。土筆つくしなどといふ者ものは、強あながち旨うまい物ものではないが、初春はつはるの容愛想きやくあいそうとして、喝かつ

采を博する事は受合である。

赤蘿蔔

又香の物として、根菜を急培へするならばラヂツシと、呼ばれる赤蘿蔔を蒔くがよい、之は箱櫃の中へ二側なり、三側なりの、柵を切つて夫へ薄く蒔くので有る。此蘿蔔は小蕪のやうな形で、洋紅のやうな赤い色をして居るが、夫は表皮計りて、肉は雪のやうに白い。西洋料理店で、サラダなどを附合せとして、生の儘出す事が有るが、鹽をまぶして食べた所で旨くはない。然し日本の糠漬か、鹽漬にすると、至極風味がよくなる。

此赤蘿蔔は、蒔きつけてから三週間で食べられるので、丁度拇指大になつた所が食べ頃である。餘り大きくすると、中に滲が出来て味が悪くなるので有る。

其外小蕪や龜戸蘿蔔などは、皆種子を蒔くと、直き食べられるから、促成床一つあると、寒中青物に不自由はない。

促成床の濕氣と害虫

未だ一つ注意したいのは、床の中の濕氣である。無論乾燥してはならぬけれども、さればとて餘り濕ると、黴菌の爲に腐敗する事がある。要するに蒸發氣で、箱櫃内の空氣が、常に濕度を帯びて居さへすればよいので、餘り水分が多いのは宜しくない。假令ば框の中を掘下るにしても、高臺の土地ならばよいが、低地であると、雨の時などは、露地へ浸み込むた雨水が、地を透して框の中へたまる事があるので、先づ低地では掘下げぬがよい。